札幌市文化財調査報告書

Ⅸ

1 9 7 5

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 Ⅸ

S 238 遺　跡
S 239 遺　跡

1975.7

札幌市教育委員会

序

本遺跡の調査は，上野幌団地造成に伴う行政調査として，一昨年昭和48年10月３日から同月23日及び同49年６月15日から７月20日までに行われました。ここは昭和47年行われた遺跡分布調査において，すでに遺跡として確認された場所ですので，造成工事に先だって当然調査を行わなければならない所であります。

分布調査における基礎的資料では，団地造成予定地の中に，包含地が２地点約5,000m² に亘って遺物の散在が認められておりましたので，かなり広範囲に亘って調査を行う予定で計画されました。しかし結果的には，本地帯はいわゆる野幌丘陵の特色といわれる腐植土が不良なところでありまして，遺物包含層の残存がきわめてすくないことがわかり，発掘面積は48年度約950m²，49年度2,550m²の合計3,500m²に縮少されたのであります。

したがって本遺跡は，遺物包含地として広範囲の面積を占めているにもかかわらず，遺構並びに遺物は，その数が非常にすくなく，殊に遺構は時期不明の小規模のピットが，数ケ所に認められたにすぎませんし，また遺物も少数の縄文早期・中期・後期の土器ですが，その中でも縄文中期終末の土器と，それに伴出した石器が主体をなしています。ただＳ239 遺跡でみつかった２個のピットは，最近注目されて来た特殊遺構であり，今後この方面の研究の貴重な資料となると思われます。

本遺跡の専任調査員として，調査及び報告書作製について，終始それに専心した佐藤雄治氏並びに札幌市教育委員会文化財調査員上野秀一氏が，本調査の結果についてまとめましたので，ここに公表いたす次第です。

昭和50年６月30日

北海道大学文学部教授
札幌市文化財保護委員　大　場　利　夫

例　　言

1　本書は，札幌市白石区厚別町上野幌の東急上野幌団地造成現場内に所在するＳ238遺跡及びＳ239遺跡の発掘調査報告書である。

2　Ｓ238遺跡は，昭和48年10月３日から10月23日にかけて，北海道大学教授・札幌市文化財専門委員大場利夫が担当し，佐藤雄治が現場の仕事を遂行した。

3　Ｓ239遺跡は，昭和49年６月15日から７月20日にかけて，札幌市教育委員会加藤邦雄，羽賀憲二の協力を得て上野秀一が担当した。

4　本書の執筆は，Ⅰを佐藤と上野が，ⅡＳ238遺跡を佐藤雄治が，ⅢＳ239遺跡を上野秀一と高橋和樹が担当した。

5　発掘調査，整理において，下記の人々より協力と助言を賜った。

　　藤本英夫，石附喜三男，野村　崇

6　発掘調査には，下記の人々が従事した。

Ｓ238遺跡……内山真澄，長谷川克浩，中津欣也，山形大学佐藤輝貴，中山芳昭，阿部明彦，北海道大学，北海学園大学学生

Ｓ239遺跡……高橋和樹，内山真澄，笠井衛二，長谷川克浩，藤井則明，山下芳教，伊藤加代子，市瀬知子，和田ひとみ，横地桂子，北海道大学学生

7　挿図浄書は，小尾栄子，佐々木裕美子，市瀬知子，和田ひとみ，藤井則明らが担当した。

8　Ｓ238遺跡の石質の肉眼鑑定は，君波和雄，赤松守雄の両氏にお願いした。

9　両年度の発掘調査中，下記の機関より，たゆまざるご理解とご協力を賜った。

　(株)じょうてつ，東急建設，東急不動産，東急電鉄，東急観光の東急企業体

凡　例

① 挿図のピット実測図縮尺20分の1，30分の1。

② 挿図の土器拓影図縮尺3分の1（S 238遺跡），2分の1（S 239遺跡），石器実測図縮尺2分の1。

③ 写真は，土器縮尺3分の1，石器縮尺2分の1（S 238遺跡）及び1分の1(S239遺跡)，3分の1（図版13B右下)。

目　　次

Ⅰ　はじめに

第１章　遺跡の位置と環境 …… 4

第２章　発掘調査の方法と層序 …… 9

第１節　調査の方法 …… 9

第２節　層　　序 …… 13

Ⅱ　Ｓ 238 遺跡

第１章　遺構及び出土遺物 …… 17

第１節　ピ ッ ト …… 17

第２節　焼　　土 …… 29

第２章　発掘区出土遺物 …… 31

第１節　土　　器 …… 31

第２節　石　　器 …… 33

第３章　総　　括 …… 36

（引用・参考文献）

Ⅲ　Ｓ 239 遺跡

第１章　遺構及び出土遺物 …… 41

第２章　発掘区出土遺物 …… 44

第１節　土　　器 …… 44

第２節　石　　器 …… 44

第３章　総　　括 …… 47

第１節　ピットについて …… 47

第２節　遺物について …… 49

第３節　遺跡の性格と時期 …… 50

（引用・参考文献）

挿　図　目　次

第１図　遺跡附近地形図

第２図　Ｓ238 遺跡地形図

第３図　Ｓ239 遺跡地形図

第４図　Ｓ239 遺跡発掘区配置図

第５図　Ｓ238 遺跡発掘区配置図

第６図　Ｓ238 遺跡土壌柱状図

第７図　Ｓ239 遺跡Ⅱ－Ｄ－13区南西壁深掘セクション

第８図　Ｓ238 遺跡第１号～第４号，第６号～第８号ピット実測図

第９図　Ｓ238 遺跡第５号，第13号，第14号，第21号，第22号ピット実測図

第10図　Ｓ238 遺跡第９号～第12号，第15号～第17号ピット実測図

第11図　Ｓ238 遺跡第18号～第20号ピット，第13号焼土実測図

第12図　Ｓ238 遺跡第23号，第24号ピット実測図

第13図　Ｓ238 遺跡第25号，第26号ピット実測図

第14図　Ｓ238 遺跡第27号ピット実測図

第15図　Ｓ238 遺跡第９号～第11号焼土実測図

第16図　Ｓ238 遺跡発掘区出土土器拓影図

第17図　Ｓ238 遺跡発掘区出土石器実測図

第18図　Ｓ239 遺跡第１号ピット実測図

第19図　Ｓ239 遺跡第２号ピット実測図

第20図　Ｓ239 遺跡発掘区出土土器拓影図

第21図　Ｓ239 遺跡発掘区出土石器実測図

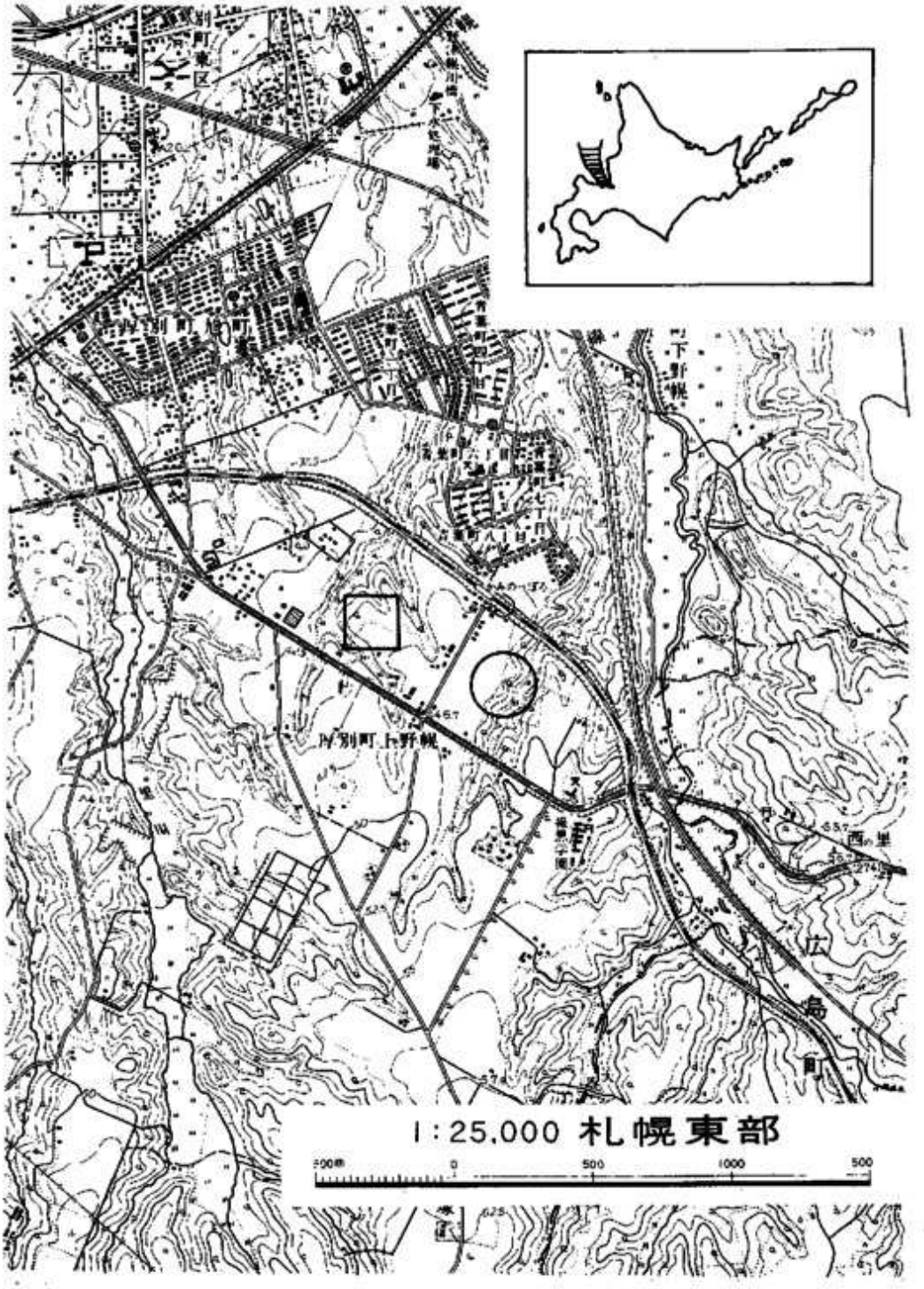
図　版　目　次

1A　S 238 遺跡遠景（東南より）
B　S 238 遺跡第 1 号ピット
2A　S 238 遺跡第 5 号，第13号，第14号，第21号，第22号ピット
B　S 238 遺跡第 9 号ピット
3A　S 238 遺跡第10号ピット
B　S 238 遺跡第11号ピット
4A　S 238 遺跡第12号ピット
B　S 238 遺跡第19号ピット
5A　S 238 遺跡第20号ピット及び第13号焼土
B　S 238 遺跡第23号ピット
6A　S 238 遺跡第 9 号焼土
B　S 238 遺跡第10号焼土
7A　S 238 遺跡第11号焼土
B　S 238 遺跡磨製石斧出土状態
8A　S 238 遺跡発掘区出土土器
B　S 238 遺跡発掘区出土石器
9A　S 239 遺跡遠景（北西より）
B　S 239 遺跡遠景（南西より）
10A　S239遺跡発掘風景(1)
B　S 239 遺跡Ⅱ－D－13区南西壁セクション
11A　S 239 遺跡第 1 号ピット（西より）
B　S 239 遺跡第 1 号ピットセクション（北西より）
12A　S 239 遺跡第 1 号ピット出土土器（右：陽像）
B　S 239 遺跡第 2 号ピット（南東より）
13A　S 239 遺跡発掘区出土土器
B　S 239 遺跡発掘区出土石器
14A　S 239遺跡発掘風景(2)
B　S 239遺跡発掘風景(3)

表　目　次

第 1 表　S 238 遺跡出土石器一覧表
第 2 表　S 239 遺跡第 2 号ピット小ピット一覧表

はじめに



第1図　遺跡附近地形図　　○印　S238遺跡　　□印　S239遺跡

この地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の25万分の1地形図を複製したものである。
（承認番号）昭50道複，第63号

Ⅰ　は　じ　め　に

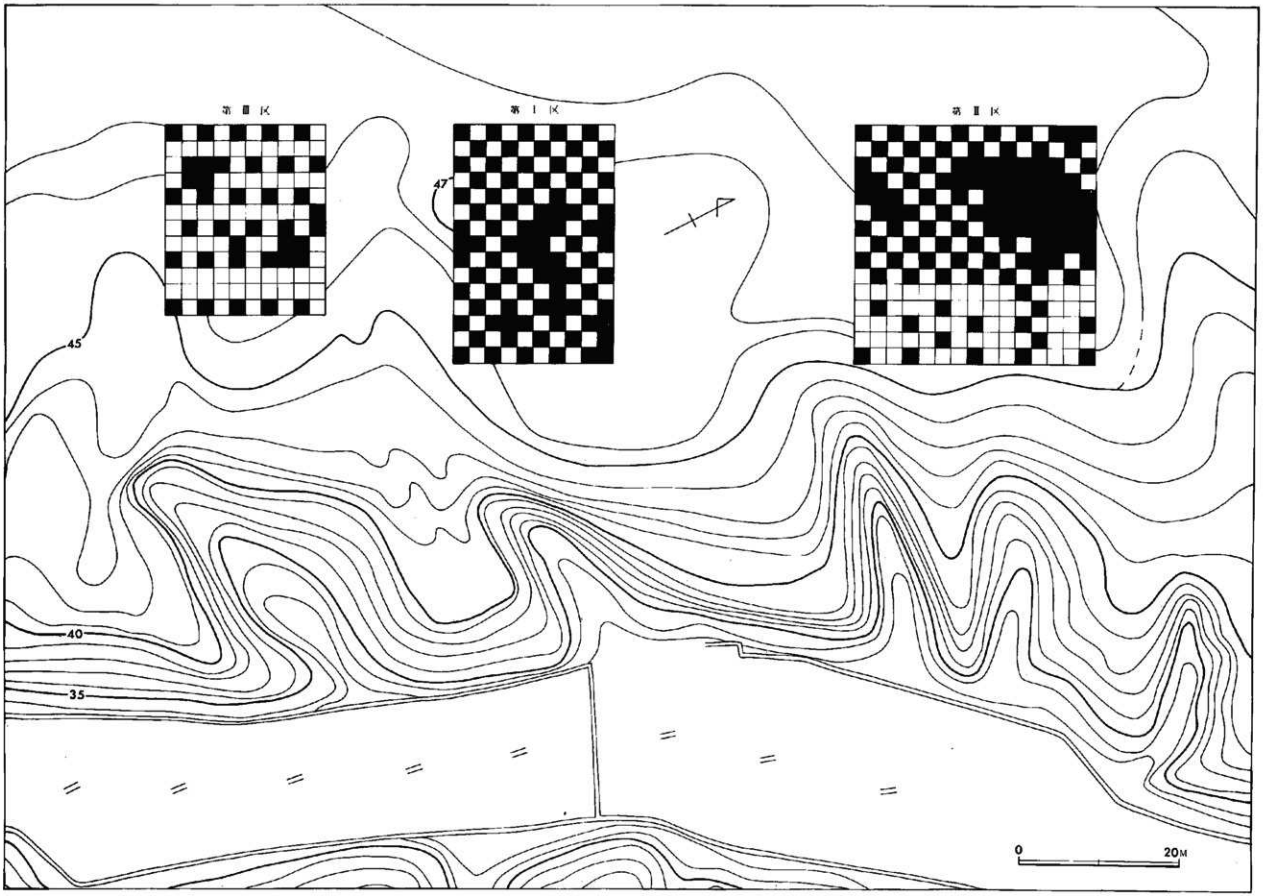
第1章　遺跡の位置と環境（第1～3図，図版1A，9A，B）

S238遺跡及びS239遺跡は，各々札幌市白石区厚別町上野幌816番地及び1004番地1外に所在する。札幌市の中心部より東方約11km，広島町との行政界附近に位置している。

附近の地形は，所謂野幌丘陵の一部で，S238遺跡は北東より流入する比較的大きな谷によって開析された標高46m前後の東南向き台地上に存在する（第2図，図版1A）。

S239遺跡は，S238遺跡の北西240mにあり，やはり北東から開析された谷の北西台地上に立地する。標高は，36～40mである（第3図，図版9A）。

札幌市埋蔵文化財台帳（札幌市教育委員会1974）によると，本遺跡附近には，S240，S241，S251～259などの諸遺跡が存在し，これらは概むね縄文時代中期，縄文時代晩期～続縄文時代にかけての遺跡である。　（佐藤　雄治・上野　秀一）



第2図　S238遺跡地形図

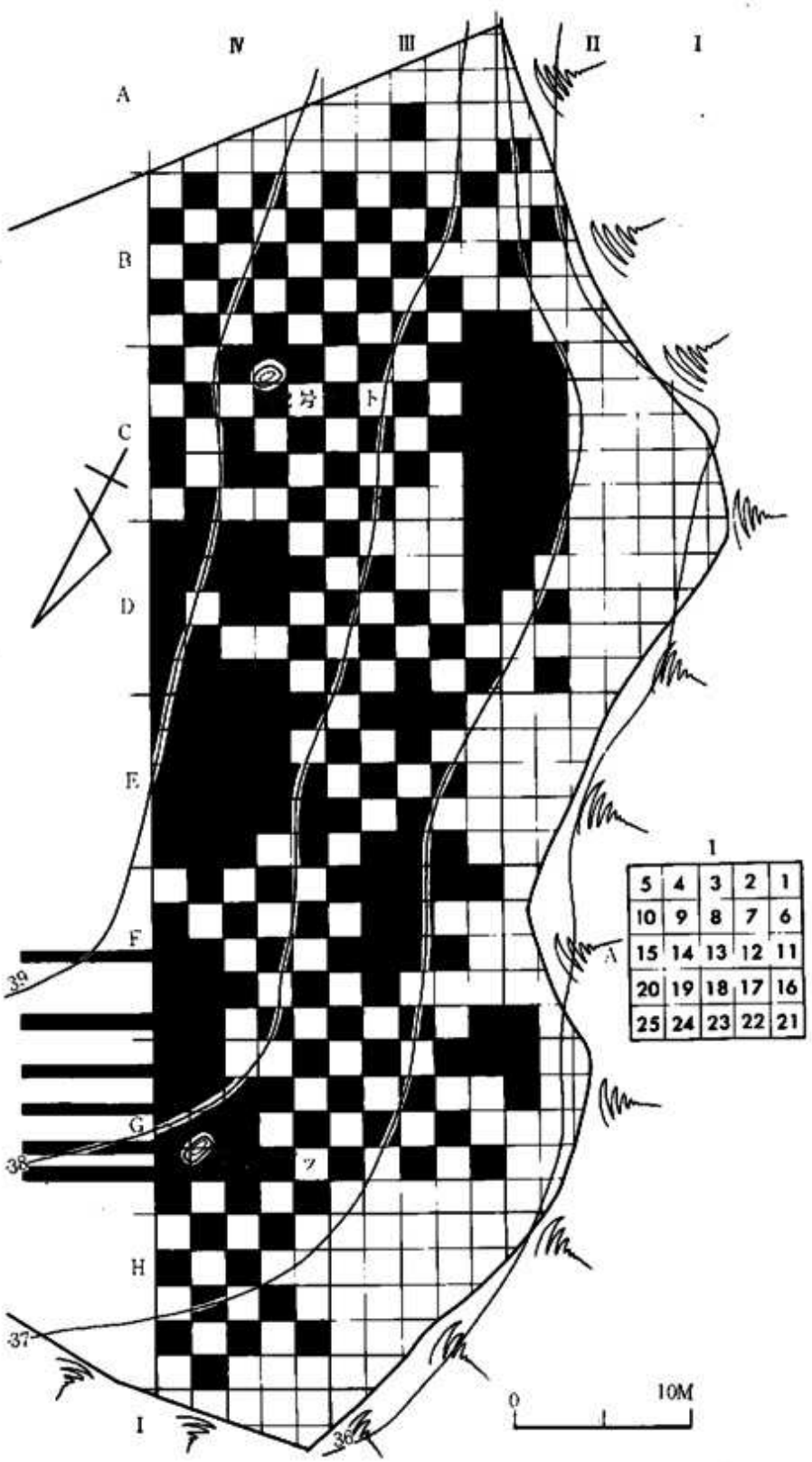
第3図　S239遺跡地形図

第2章　発掘調査の方法と層序

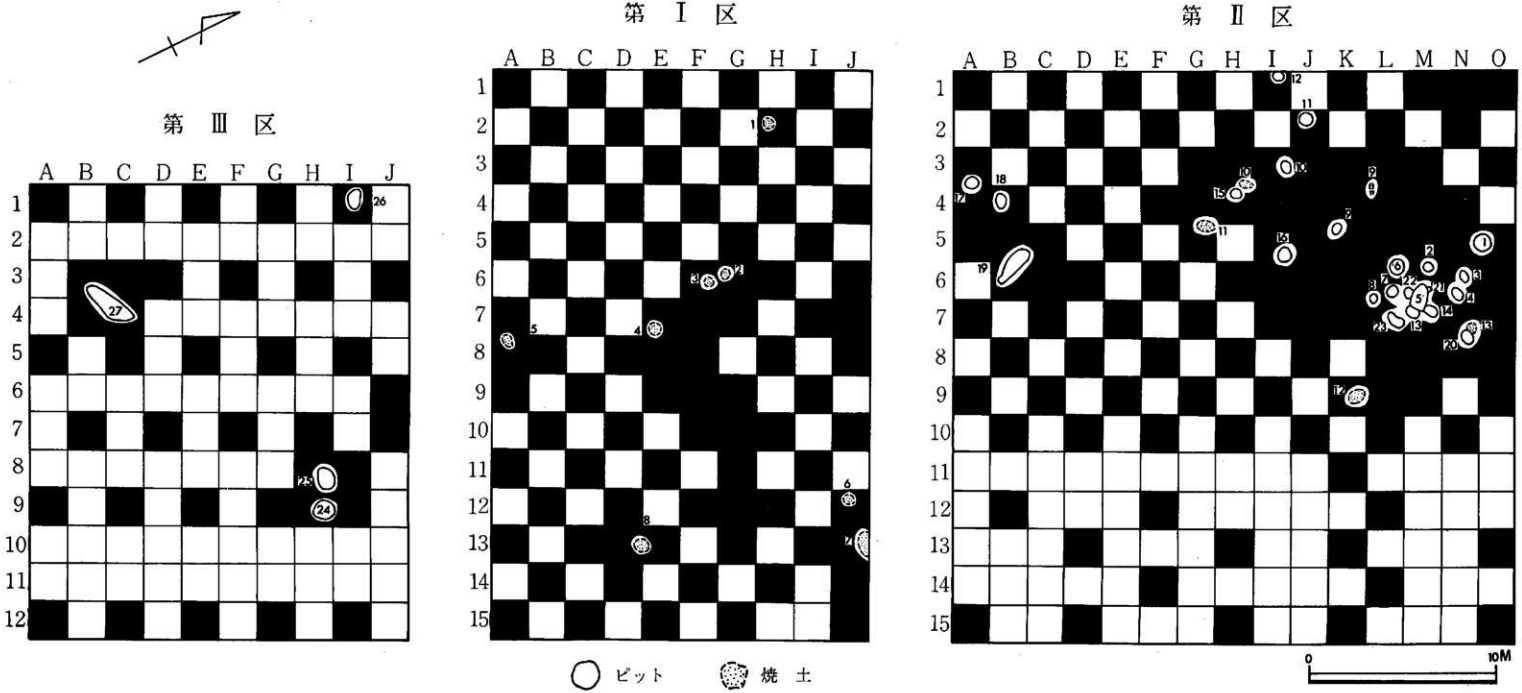
第1節　調査方法（第4，5図，図版9B）

発掘区は，S238遺跡は台地の西側より第Ⅲ区，第Ⅰ区、第Ⅱ区の3大グリットを設定した。第1区は，20m×30mの600㎡，第Ⅱ区は，30m×30mの900㎡、第Ⅲ区は.20m×24mの480㎡である。発掘面積は，第Ⅰ区が344㎡，第Ⅱ区が456㎡，第Ⅲ区が152㎡の計952㎡である。S239遺跡の方は，10m×10mの大グリットを基本とし，これを更に2m×2mの小グリットに分割した。発掘対象面積は，大約2550㎡で遺構・遺物の出土状態を鑑みて，結局総発掘調査面積は，約868㎡である。なおグリットの北東部にトレンチを6本入れている。小グリットの名称は各々第4図，第5図に示した通りである（図版9A，B）。

S238遺跡の発掘地点一帯は，雑草や熊笹が密生し，その上，所々に切り株が残存していたため，発掘区の一部にブルドーザを動人した。　（佐藤　雄治・上野　秀一）



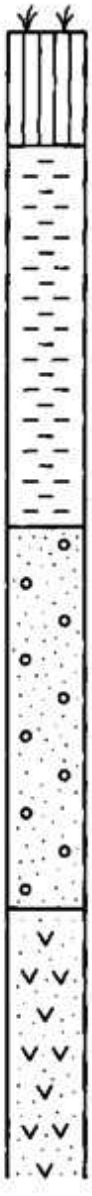
第4図　S239遺跡発掘区配置図



第5図　S238遺跡発掘区配置図

第2節　層　　序（第6，7図，図版10B）

両遺跡附近の台地の地質は，標高30～31mを境にして，上部の支笏火山噴出物と下部の野幌層と称される洪積世堆積物とで構成されている。これらの下は，新第三紀堆積岩が基盤になっているものと考えられる。上部の支笏火山噴出物は，九州地方のシラスに相当する火山灰で約3万年前に支笏カルデラから大量に流出した軽石流堆積物と称されるもので，流出時の高熱により熔結作用を受けている。又，淘汰が悪く大小の粒子が混合している。下部の野幌層は，比較的堅い粘性土を主とし，砂や礫を互層状に挾むが，これらの連続性は余り良くない。又，谷底には，台地の開析後に新らしく堆積した沖積層が薄く堆積している（北海道土質コンサルタント1973）。



S238遺跡の発掘地点の層序は，第6図に柱状にして図示した。即ち，

第Ⅰ層：表土層で，暗褐色或いは暗黄褐色を呈する。厚さ約11～15cmである。

第Ⅱ層：黄褐色粘土層で，木炭片が散発的に混在する地山である。厚さ約50cm前後。

第Ⅲ層：淡赤褐色火山灰層で，直径5mm位の軽石が点在する。厚さ約50cm前後。

第Ⅳ層：灰白色火山灰層で，直径5mm位の軽石や角礫が点在する。軽石の最大直径は20mm位である。厚さ約3m以上。

遺跡附近一帯は，腐植土の発達が非常に悪く，所によっては，腐植土が殆んど見られず，又整地及び耕作などにより，プライマリーな遺物包含層は，全く残っていない。遺物包含層は，本来第Ⅰ層であるが，上述の如く撹乱を受けているために，第Ⅱ層上面からも出土した。遺物は，層位的に捉えることはできなかったが，縄文時代中期末の単純資料を出土している。

S239遺跡の方も，Ⅱ－D－13区の南西壁を1.75m掘ったので説明しておく（第7図，図版10B）。

第Ⅰ層：黒色土層。

第Ⅱ層：暗褐色粘質土層（漸移層）。

第Ⅲ層：褐色粘土層（地山）。

第Ⅳ層：灰褐色火山灰質粘土層。

第Ⅴ層：灰褐色火山灰質粘土層と黄色火山灰質粘土層との互層。

第6図　S238遺跡土壌柱状図（1／10）

第Ⅵ層：白色粘土層。

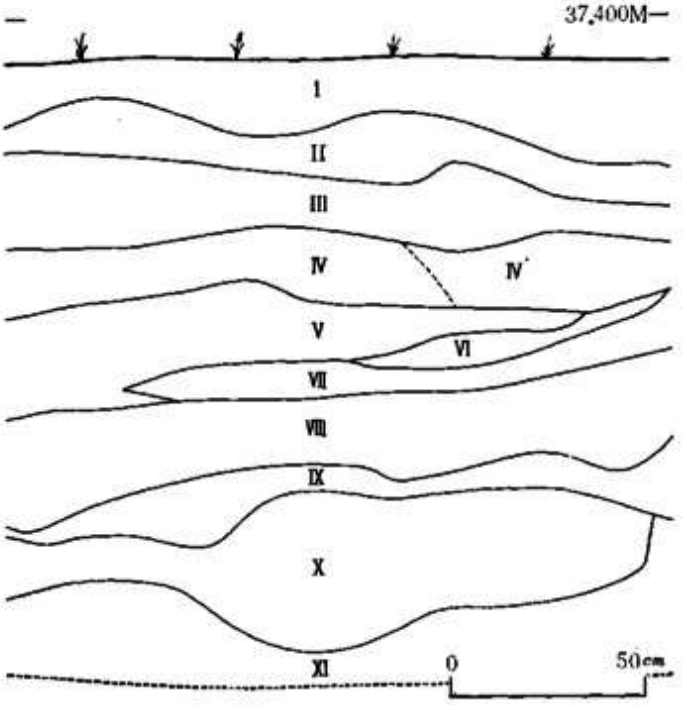
第Ⅶ層：灰褐色火山灰質粘土層。

第Ⅷ層：白色粘土層と黄色粘土層との互層。

第Ⅸ層：灰褐色（火山灰質）粘土層。

第Ⅹ層：第Ⅷ層と同じ。

第Ⅺ層：暗灰褐色火山灰層（粒子粗い）。



第７図　Ｓ239遺跡Ⅱ－Ｄ－13区南西壁深掘セクション

本遺跡の方は，黒色土層が谷側において流れ込んだ状態で厚く堆積していたが，山側にいくに従い，漸次薄くなっている。遺構及び遺物がみつかったのは，主に黒色土の堆積が薄く，地山近くまで耕作の入った山側――北東部側である。

（佐藤　雄治・上野　秀一）

S 238　遺　　跡

Ⅱ S238 遺　跡

第1章 遺構及び出土遺物

第1節 ピ　ッ　ト

ピットは，第Ⅰ区では全く検出されず，第Ⅱ区で23個，第Ⅲ区で4個の計27個検出された。これらのピットは，第1号，第19号ピットを除いては，全く遺物の出土が認められず，また第1号，第19号ピットとて，遺物は，覆土最上面（撹乱層？）から土器片が各1点みつかったのみで，いずれもこれらのピットの掘り込まれた時期およびその性格については一切明らかにすることはできなかった。

なお，ピットのプランの確認面は，すべて表土の暗褐色土層を除去した段階の第Ⅱ層黄褐色粘土層で，以下に示すピットの深さは遺構確認面からの深さである。

第1号ピット　（第8図，図版1B）

第Ⅱ区N5・O5の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，表土層と同様の暗褐色を呈する1層のみである。大きさは，長径91cm，短径81cmで，深さは29cmである。平面形は，不整円形を呈する。壁は，幾分硬く，立ち上がりは南側ではほぼ垂直に近く，北側ではゆるやかな傾斜となる。断面形は，ボール状を呈し，底面は，幾分硬く平坦である。

遺物は，綾絡文の見られる土器片1点のみで，覆土の上面より出土した。この土器片は，遺構確認面にプラウの痕跡が明瞭に認められるため，耕作の際に混入したものと考えられる。

第2号ピット　（第8図）

第Ⅱ区M6グリッドで検出された。

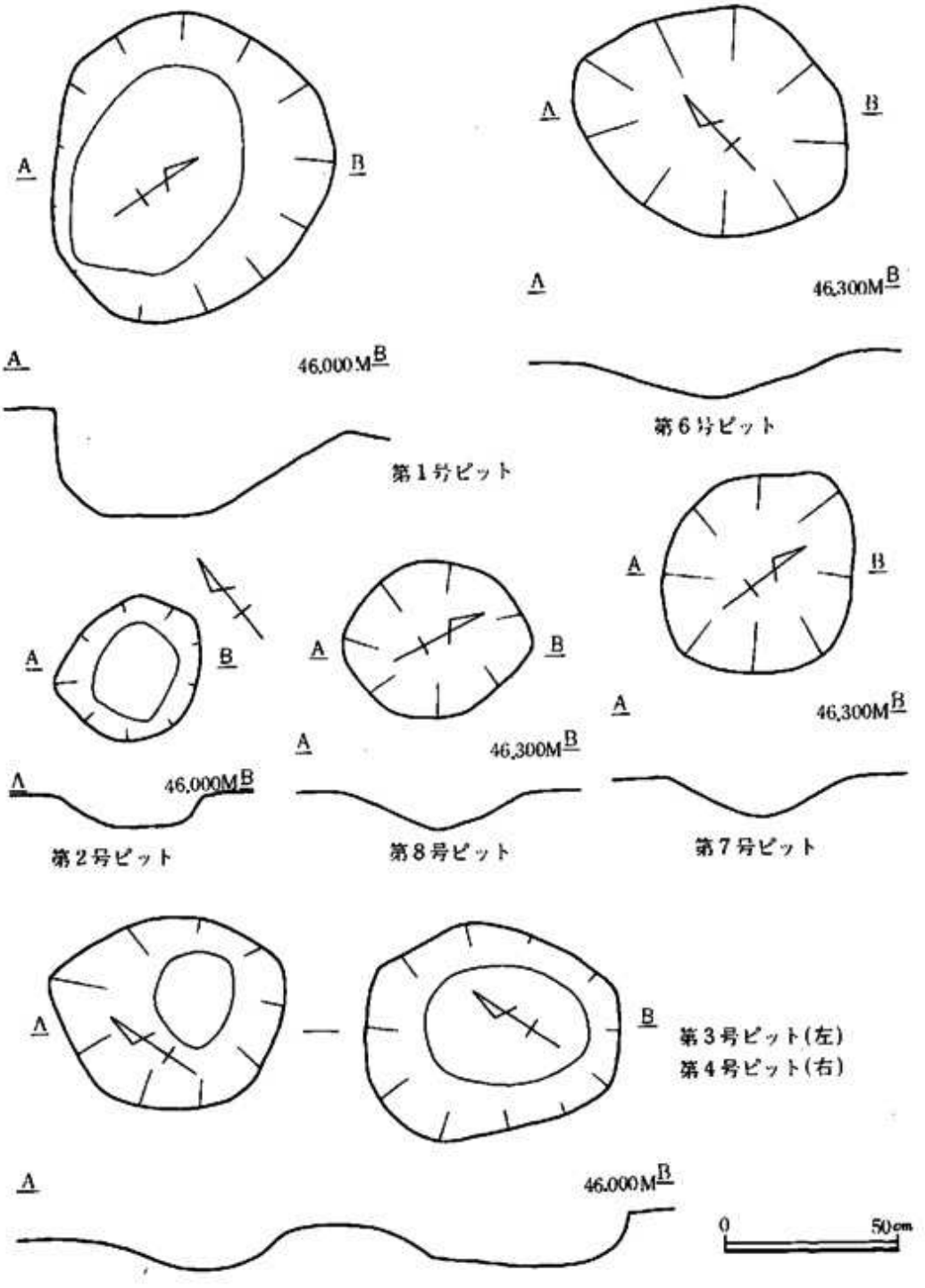
ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する1層のみである。

大きさは，長径43cm，短径42cmで，深さは10cmである，平面形は，不整円形を呈する。壁は，やゝ硬く，立ち上がりは，東側ではやゝ急傾斜であるが，西側ではなだらかな傾斜となる。断面形は，皿状を呈し，底面は，やゝ硬く平坦である。

第3号ピット　（第8図）

第Ⅱ区N6グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗黄褐色を呈する1層のみである。



第8図　第1号～第4号・第6号～第8号ピット実測図

大きさは，長径68cm，短径55cmで，深さは11cmである。平面形は，卵形を呈し，長軸は，北西－南東である。壁は，軟らかく，立ち上がりは，割合なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟らかく丸味を帯びる。

第4号ピット　（第8図）

このピットは，第3号ピットのすぐ南側の同一グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，1層のみで暗褐色を呈する。

大きさは，長径74cm，短径67cmで，深さは14cmである。平面形は，不整円形を呈する。壁は，やゝ硬く，立ち上がりは，東側では急傾斜であるが，西側では割合なだらかである。断面形は，皿状を呈し，底面は，やゝ硬く平担である。

第5号ピット　（第9図，図版2A）

第Ⅱ区M6・M7の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，以下の通りである。

第Ⅰ層：暗赤褐色土層。やゝ硬くしまっているが，多少吸湿性がある。

第Ⅱ層：黄褐色土層。

第Ⅲ層：暗褐色土層。第Ⅱ層と共に表土層と同色を呈し，多少粘質性があり，やわらかい。

第Ⅳ層：黒褐色土層。多少粘性を含み，やわらかい。

第Ⅴ層：暗黄褐色粘質土層。漸移層で，全体的に暗い感じがする。

第Ⅴ′層：暗黄褐色粘質土層。黄色味が強く，地山に近い硬さである。

第Ⅴ″層：暗黄褐色粘質土層。第Ⅴ′層より若干暗い感じがするが，第Ⅴ層より黄色味が強く，やわらかい。

第Ⅵ層：黄褐色粘土層。地山である。

大きさは，長径推測135cm，短径84cmで，深さは25cmである。更に，北西の一部に，長径57cm，短径39cm，深さ32cmの掘り込みがある。平面形は，不整楕円形を呈し，長軸は，北西－南東である。壁は，非常に硬くしまっていて，立ち上がりは，急傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，壁と同様に非常に硬く，平担に掘り込まれている。

なお，このピットは，第13・14・21・22号ピットと重複するが，相互の新旧関係を促えることはできなかった。

第6号ピット　（第8図）

第Ⅱ区L5・L6の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，黒褐色を呈する1層のみである。

大きさは，長径84cm，短径67cmで，深さは12cmである。平面形は，不整円形を呈する。

壁は，軟弱でしまりが悪く，立ち上がりは，ゆるやかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，壁と同様に軟弱でやゝ尖る。

第7号ピット　（第8図）

第Ⅱ区Ｌ６グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，１層のみで黒褐色を呈する。

大きさは，長径66cm，短径57cm，深さは12cmである。平面形は，不整円形を呈する。壁は，極めて軟弱で，立ち上がりは，割合ゆるやかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，極めて軟弱で丸味を帯びる。

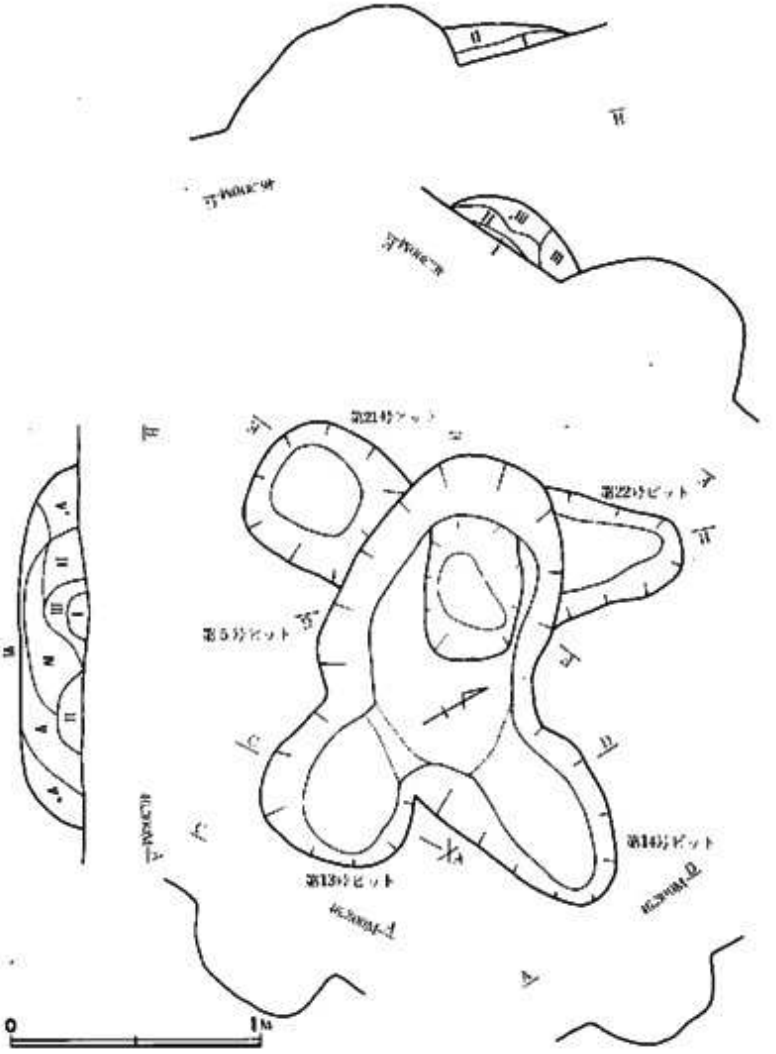
第8号ピット
（第8図）

第Ⅱ区Ｌ６・Ｌ７の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径55cm，短径45cm，深さは11cmである。平面形は，不整円形を呈する。壁は，軟らかく，立ち上がりは，割合なだらかな傾斜をみせる。断面形は，皿状を呈し，底面は，壁と同様に軟らかくやゝ尖る。

第9号ピット
（第10図，図版２B）

第Ⅱ区Ｋ４・Ｋ５の両グリッドにわた



第9図　第5号・第13号・第14号・第21号・第22号ピット実測図

って検出された。

ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径75cm，短径52cm，深さは７cmで，北側隅が，直径22cm，深さ13cmと更に掘り込まれている。平面形は，不整楕円形を呈し，長軸は，ほぼ南－北である。壁は，軟らかく，立ち上がりは，北側ではやゝ急傾斜であるが，南側ではゆるやかな傾斜となる。底面は，軟らかく，北側に向ってなだらかな傾斜となり，小ピットは丸味を帯びる。

第10号ピット　（第10図，図版３Ａ）

第Ⅱ区Ｉ３グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径68cm，短径55cm，深さは20cmで，北側隅が，長径38cm，短径10cm，深さ11cmと更に掘り込まれている。平面形は，不整円形を呈する。壁は，軟弱でしまりが悪く，立ち上がりは，西側では急傾斜であるが，東側では割合なだらかな傾斜となる。断面形は，摺鉢状を呈し，底面は，すこぶる軟弱で，北西に向って比較的ゆるやかに傾斜している。

第11号ピット　（第10図，図版３Ｂ）

第Ⅱ区Ｊ２グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径67cm，短径58cm，深さは12cmである。平面形は，卵形を呈し，長軸は，南－北である。壁は軟らかく，立ち上がりは，割合なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟らかく平坦である。

第12号ピット　（第10図，図版４Ａ）

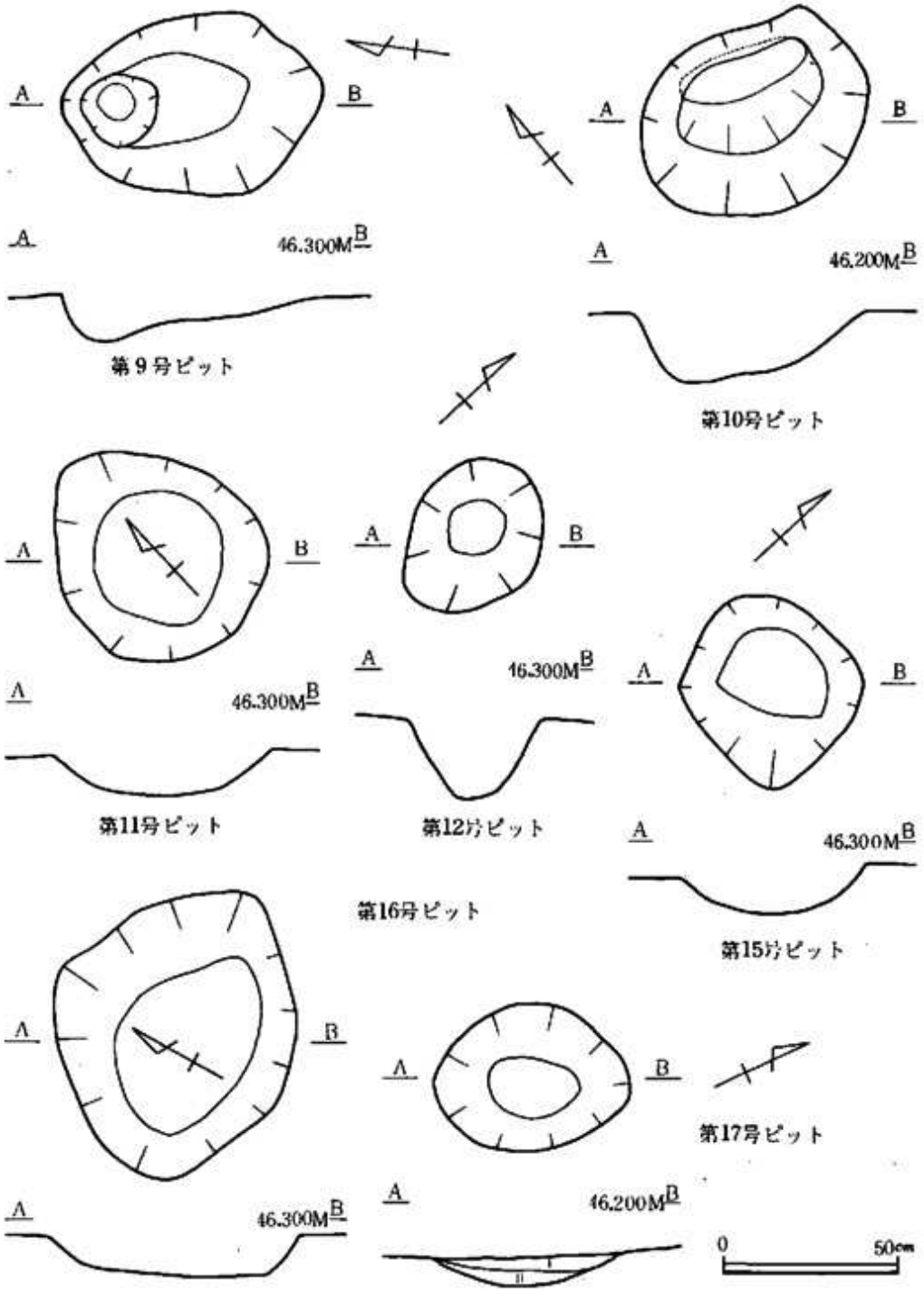
第Ⅱ区Ｉ１グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，１層のみで暗褐色を呈する。大きさは，長径48cm，短径38cm，深さは23cmである。平面形は，不整円形である。壁は，すこぶる軟弱で，立ち上がりは，急傾斜である。断面形は，摺鉢状を呈し，底面は，極めて軟弱で，丸味を帯びて尖る。

第13号ピット　（第９図，図版２Ａ）

第Ⅱ区Ｍ７グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗黄褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径推測70cm，短径62cm，深さは26cmである。平面形は，現存部分より推測すると，不整円形を呈するものと考えられる。壁は，非常に軟弱で，立ち上がりは，東側では急傾斜をみせるが，西側では割合なだらかな傾斜となる。断面形は，ボール状を呈し，底面は，極めて軟弱で平坦で



第10図　第9号～第12号・第15号～第17号ピット実測図

ある。

このピットは，前述の第５号ピットと重複するが，その新旧関係を促えることはできなかった。

第14号ピット　（第９図，図版２Ａ）

このピットは，第13号ピットのすぐ北側の同一グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径推測107㎝，短径56㎝，深さは21㎝である。平面形は，現存部分より推測すると，不整楕円形を呈するものと考えられ，長軸は，ほぼ東－西である。

壁は，軟らかく，立ち上がりは，割合急傾斜である。断面形は，ボール状を呈し，底面は，軟らかく平担である。

このピットも，第５号ピットと重複するが，相互の新旧関係を促えることはできなかった。

第15号ピット　（第10図）

第Ⅱ区Ｈ４グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗黄褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径55㎝，短径52㎝，深さは13㎝である。平面形は，不整円形である。壁は，すこぶる軟弱で，立ち上がりは，比較的なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，壁と同様に極めて軟弱で，丸味を帯びる。

第16号ピット　（第10図）

第Ⅱ区Ｉ５グリットで検出された。

ピットの埋没状態は，１層のみで暗黄褐色を呈する。大きさは，長径85㎝，短径72㎝，深さは12㎝である。平面形は，不整円形である。壁は，南側では硬くしまっているが，北側は軟らかい。立ち上がりは，割合なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，硬くしまっていて平担である。

第17号ピット　（第10図）

第Ⅱ区Ａ３・Ａ４の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，

第Ⅰ層：黒褐色土層。

第Ⅱ層：暗黄褐色土層。漸移層である。

大きさは，長径55㎝，短径42㎝，深さは９㎝である。平面形は，不整楕円形を呈し，長

軸は，北東－南西である。壁は，硬くしまっていて，立ち上がりは，なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟く丸味を帯びる。

第18号ピット（第11図）

第Ⅱ区Ｂ４グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，暗黄褐色を呈する１層のみである。大きさは，長径71㎝，短径44㎝，深さは11㎝である。平面形は，不整楕円形で，長軸は，北東－南西である。壁は，軟らかく，立ち上がりは，なだらかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟らかく丸味を帯びる。

第19号ピット（第11図，図版４Ｂ）

第Ⅱ区Ｂ５・Ｂ６・Ｃ５の３グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，以下の通りである。

第Ⅰ層：黒褐色土層。

第Ⅱ層：赤褐色土層。

第Ⅲ層：暗黄褐色土層。黒色土を若干混入する。

第Ⅲ'層：暗黄褐色土層。灰白色を呈する火山灰を若干含む。

第Ⅳ層：暗黄褐色土層。漸移層である。

第Ⅳ'層：黄褐色粘土層。非常に粘質性に富み軟らかい。地山に近い。

大きさは，長径218㎝，短径91㎝，深さは76㎝である。平面形は，不整長楕円形で，長軸は，ほぼ南－北である。壁は，軟らかく，立ち上がりは，北側は急傾斜であるが，南側は割合なだらかな傾斜をみせる。底面は，軟らかく，北側に向ってゆるやかな傾斜となる。

遺物は，縄文のみられる土器片１点のみで，第Ⅱ層に含まれていたが，耕作面に近いことから混入したとも考えられる。従って，このピットの掘り込まれた時期を決定するには，いささか条件不足で，ピットの性格についても同様である。

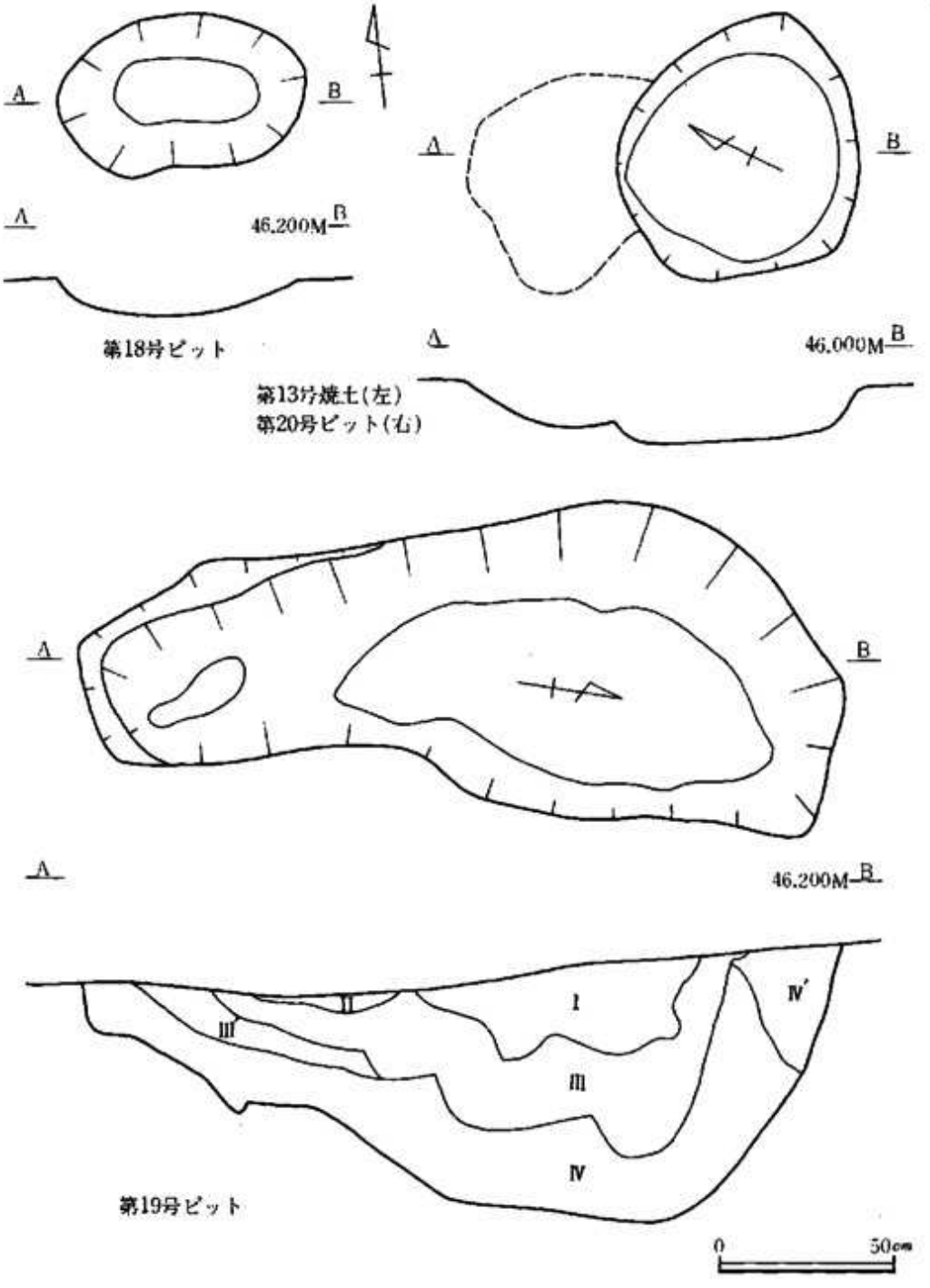
第20号ピット（第11図，図版５Ａ）

第Ⅱ区Ｎ７・Ｎ８の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，黒褐色を呈する１層のみである。

大きさは，長径80㎝，短径69㎝，深さは17㎝である。平面形は，不整円形を呈する。壁は，軟弱で，立ち上がりは，比較的なだらかに傾斜している。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟弱で平担である。

このピットは，北側の一部を第13号焼土により被われていることから，この焼土が営まれる以前に掘り込まれたものであるが，出土遺物などが全く検出されないために，時期を



第11図　第18号～第20号ピット・第13号焼土実測図

決定することはできなかった。

第21号ピット　（第9図，図版2A）

第Ⅱ区M6グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，以下の通りである。

第Ⅰ層：黒褐色土層。

第Ⅱ層：暗褐色土層。粘質性強い。

第Ⅲ層：暗黄褐色土層。粘質性にとむ。

第Ⅲ'層：暗黄褐色土層。漸移層で軟らかくしまりが悪い。

大きさは，南北57cm，東西現存部52cm，深さは18cmである。平面形は，現存部分より推測すると，隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸は，北東－南西となる。壁は，南側は硬くしまっているが，他の部分では幾分軟らかい。立ち上がりは，西側ではやゝ急傾斜であるが，東側では割合なだらかな傾斜になるものと考えられ，底面は，硬くしまっていて丸味を帯びる。

このピットは，前述の第13・14号ピットと同様に，第5号ピットと重複するが，その新旧関係を促えることはできなかった。

第22号ピット　（第9図，図版2A）

このピットは，前述の第21号ピットと同一グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，

第Ⅰ層：暗褐色土層。木炭粒を若干含む。

第Ⅱ層：暗黄褐色土層。漸移層である。

大きさは，東西現存部52cm，南北47cm，深さは16cmである。平面形は，現存部分より推測すると，不整楕円形を呈するものと考えられ，長軸は，北東－南西となる。壁は，やゝ軟らかく，立ち上がりは，ゆるやかな傾斜である。断面形は，皿状を呈し，底面は，壁と同様の状態で，丸味を帯びるものと考えられる。

このピットも，第5号ピットと重複するが，前述の第13・14・21号ピットと同様に，新旧関係，時期及び性格については，全く促えることはできなかった。

第23号ピット　（第12図，図版5B）

第Ⅱ区L7グリッドで検出された。

ピットの状態は，以下の通りである。

第Ⅰ層：暗黄褐色土層。全体的に黄色味が強い。

第Ⅱ層：暗褐色土層。全体的に茶褐色味が強い。

第Ⅲ層：暗褐色土層。全体的に黒色味が強く，第Ⅱ層に比して若干暗い感じがする。

第Ⅳ層：暗黄褐色土層。漸移層である。

第Ⅴ層：黄褐色粘土層。地山である。

大きさは，長径107㎝，短径58㎝，深さは19㎝である。平面形は，ハート形を呈する。壁は，中央部より東側では軟らかいが，西側ではやゝ硬くしまっている。立ち上がりは，東側は急傾斜であるが，西側では幾分なだらかな傾斜となる。断面形は，東側はボール状を，西側は皿状を呈する。底面は，東側は軟らかく西側は硬くしまっていて，いずれも丸味を帯びる。

このピットは，層位からすると二連ピットになろうが，その新旧関係，時期及び性格については，促えることはできなかった。

第24号ピット　（第12図）

第Ⅲ区Ｈ９・Ｉ９の両グリッドにわたって検出された。

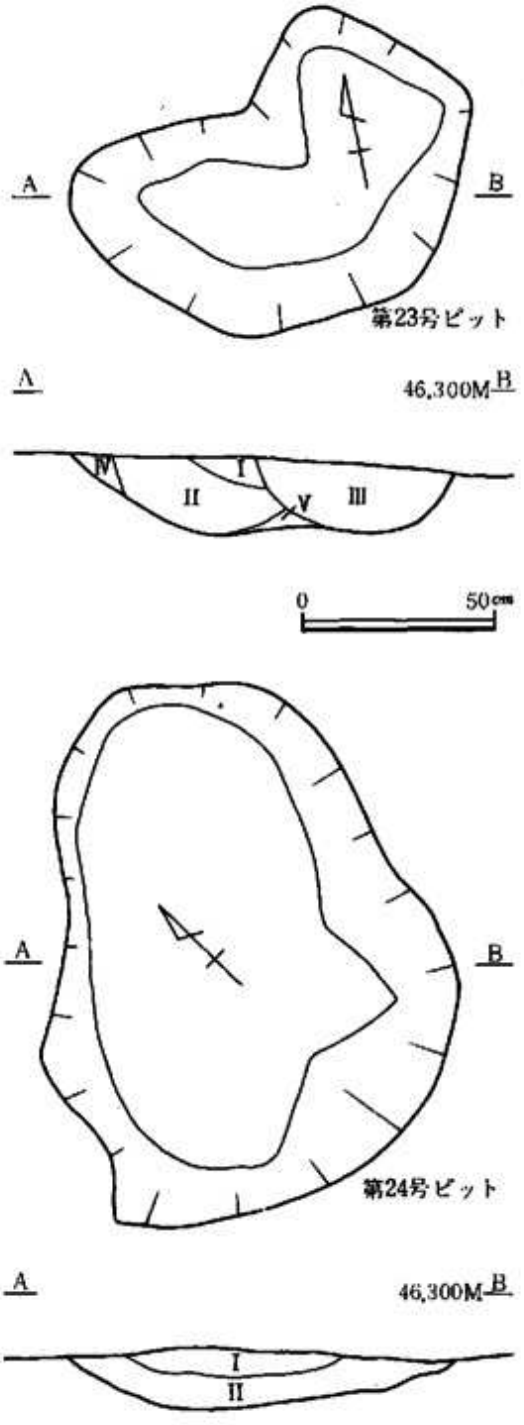
ピットの埋没状態は，

第Ⅰ層：黒色土層。黄褐色土がブロック状に混在する。

第Ⅱ層：黄褐色土層。軟らかくしまりが悪い。

大きさは，長径140㎝，短径121㎝，深さは12㎝である。平面形は，不整楕円形を呈し，長軸は，北東－南西である。壁及び底面は，共に凹凸にとみ軟らかく，木の根と考えられる小さな穴が至る所にみられる。立ち上がりは，なだらかな傾斜をみせ，断面形は，皿状を呈する。

恐らく，このピットは切り株が掘り起こ



第12図　第23号・第24号ピット実測図

された際にできたものであろう。

第25号ピット（第13図）

第Ⅲ区Ｈ８・Ｉ８の両グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，

第Ⅰ層：黒色土層。

第Ⅱ層：黄褐色土層。黒色土が若干混入する。

第Ⅲ層：黄褐色土層。軟らかい。

大きさは，長径137㎝，短径112㎝，深さは15㎝である。平面形は，不整形である。壁は，底面と共に凹凸がはげしくて軟らかく，木の根の痕が随処にみられる。立ち上がりは，なだらかな傾斜をみせ，断面形は，皿状を呈する。

従ってこのピットも，前述の第24号ピットと同様に，切り株が掘り起こされた折にできたものであろう。

第26号ピット　（第13図）

第Ⅲ区Ｉ１グリッドで検出された。

ピットの埋没状態は，

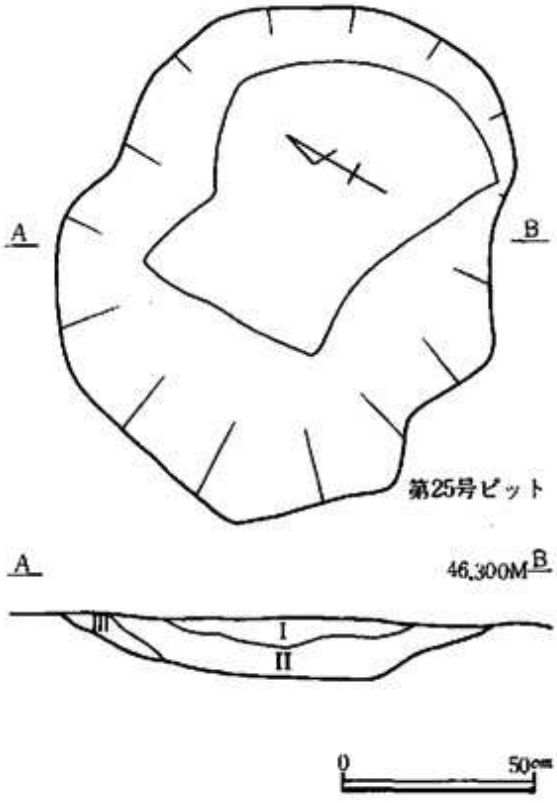
第Ⅰ層：黒褐色土層。

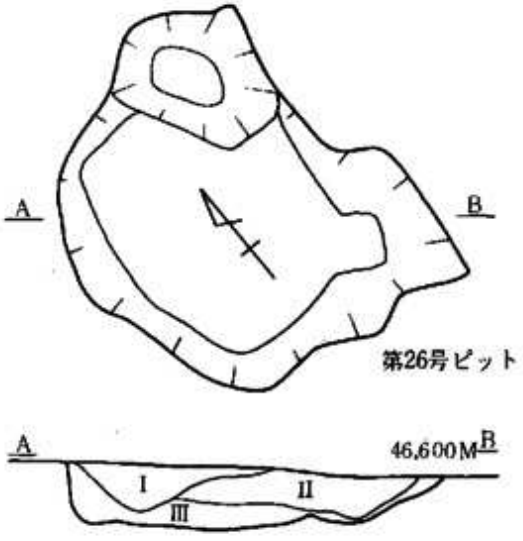
第Ⅱ層：暗褐色土層。

第Ⅲ層：黄褐色土層。

大きさは，長径108㎝，短径99㎝，深さは16㎝である。又，北側隅に，長径43㎝，短径35㎝，深さ13㎝の小ピットが掘り込まれている。平面形は，不整形である。壁は，軟弱で，立ち上がりは，東側ではなだらかな傾斜をみせるが，西側は急傾斜となる。

断面形は，皿状を呈し，底面は軟弱で





第13図　第25号・第26号ピット実測図

幾分凹凸にとんでいる。

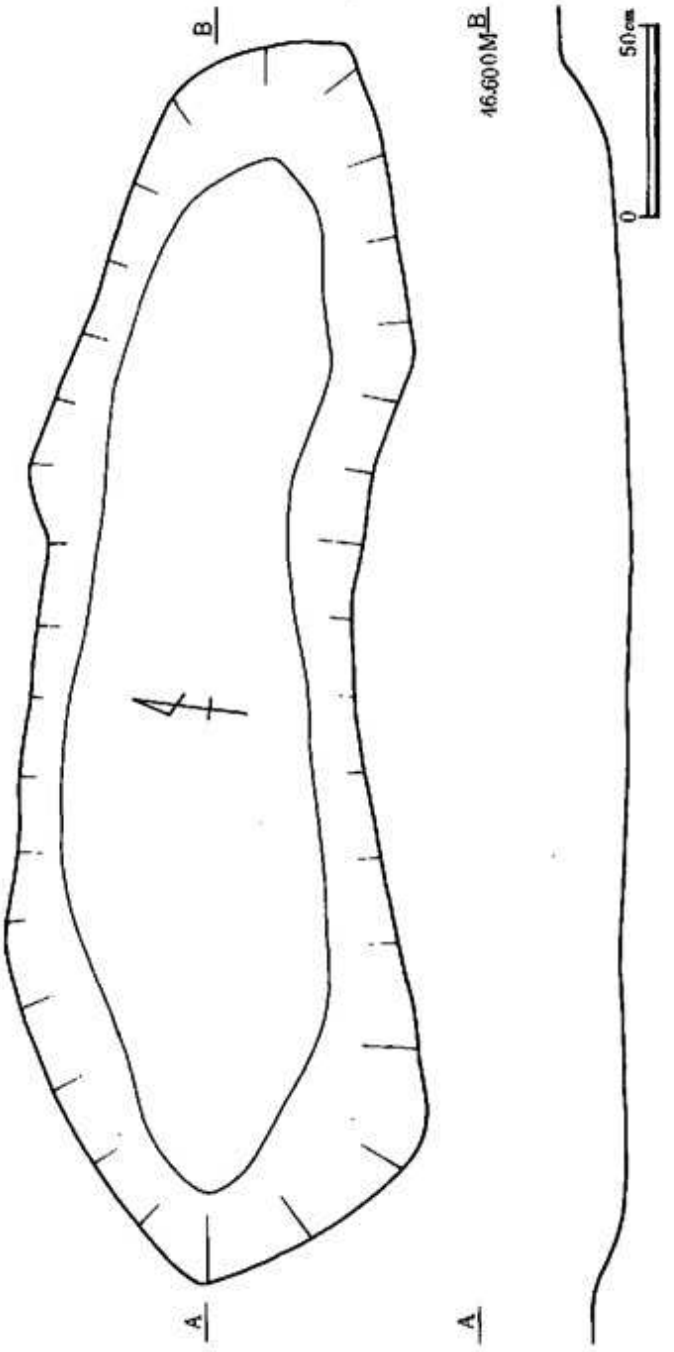
第27号ピット　（第14図）

第Ⅲ区B3・B4・C3・C4の4グリッドにわたって検出された。

ピットの埋没状態は，暗黄褐色を呈する1層のみである。

大きさは，長径323cm，短径269cm，深さは15cmである。平面形は，不整楕円形を呈し，長軸は，ほぼ東一西である。壁は，軟らかく，立ち上がりは，なだらかである。断面形は，皿状を呈し，底面は，軟らかく凹凸にとむ。

（佐藤　雄治）



第14図　第27号ピット実測図

第2節　焼　　土

（第4，15図，図版5A．6，7A）

焼土は，第Ⅰ区8ケ所，第Ⅱ区5ケ所の計13ケ所で検出されたが，第Ⅲ区では全く検出されなかった。

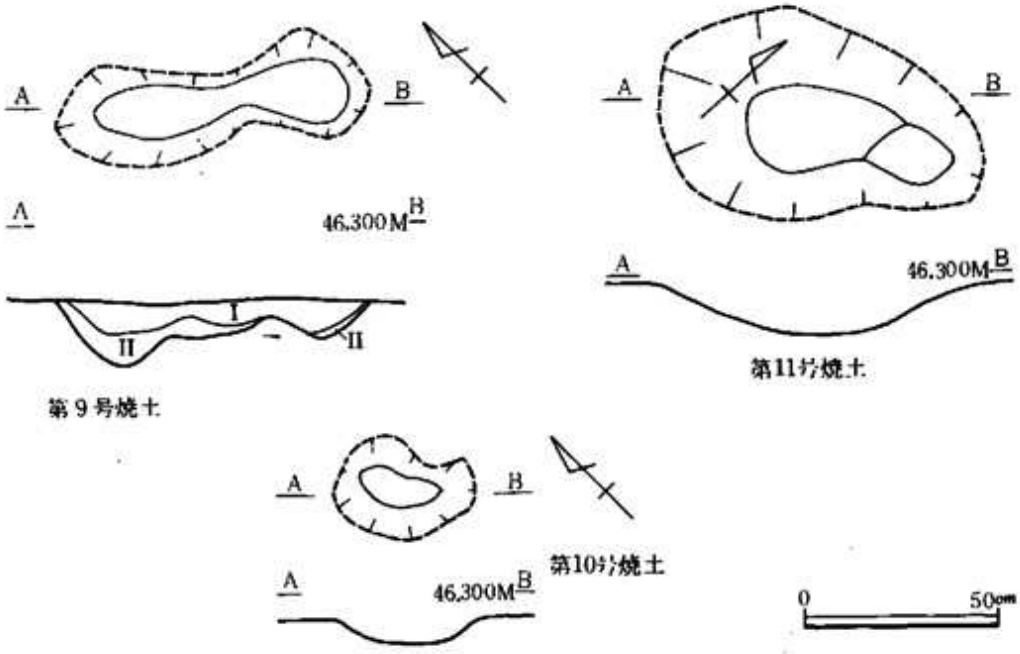
大きさは，直径50～70cmが最も多く，最小36×27cm，最大で120×90cmである。平面形は，円形ないし楕円形を呈する。深さは10～20cm程である。堆積状態は，おおむね赤褐色を呈する1層のみで，幾つかには若干の木炭片を混存する。

底面及び壁は，焼けて硬く，断面形は皿状を呈している。

この焼土には，石囲いとか埋甕などの特別の施設はなく，また遺構に伴うものでもない。

周辺部も特に硬くはなく，人為的に踏み固められた形跡もない。

なお，第９号焼土では，縄文のみられる土器片１点が，上層より検出されている。この焼土が営なまれた時期は，本遺跡がサイベ沢Ⅵ式頃の単一土器を出土することから，この時期の所産の可能性もあろうが，明確ではない。　（佐藤　雄治）



第15図　第９号～第11号焼土実測図

第2章　発掘区出土遺物

本遺跡の第Ⅰ区～第Ⅲ区までの各グリッドより出土した遺物は，土器片，石器及び剥片で，これらは前述の通り層位的には全く捉えることはできなかった。

第1節　土　　器（第16図，図版8A）

出土土器のすべては破片で，復原可能な土器及び完形品は全く発見されなかった。ここでは主として文様構成により，便宜的に分類し，以下に説明する。

第1類　（第16図1）

縄文を地文とし，口唇上に篦状工具による刻み目がある。口縁部破片である。

器形は，深鉢形であろう。胎土中には，微量の砂粒を含む。焼成は，概して良好で，色調は，灰褐色を呈する。器厚は，1.0㎝である。

第2類　（第16図2～4，11～15）

この仲間は，地文に縄文を有し，口唇上あるいは頸部から胴部にかけて，半截竹管工具による連続刺突文が施文された例である。

2は，口縁部破片で，口縁部に縦走する2列の連続刺突文があり，口唇上にも1列の連続刺突文がある。

3も，口縁部破片である。表面は磨滅の度合がはげしく，地文としての縄文はみられないが，本来は施文されていたものと考えられる。口唇上に1列の連続刺突文がある。

11～13は，同一個体で，11，12は口縁部破片である。口縁部を肥厚させ，地文の縄文を施文後，口唇上に2列，口縁に4～5列の横走する連続刺突文を施文している。13には，内面にも縄文がある。

14，15は，胴部破片で，横位に4～5列の連続刺突文がある。

器形は，すべて深鉢形であろう。胎土中には，2には砂礫を，3，4，15には砂粒を若干混入する。

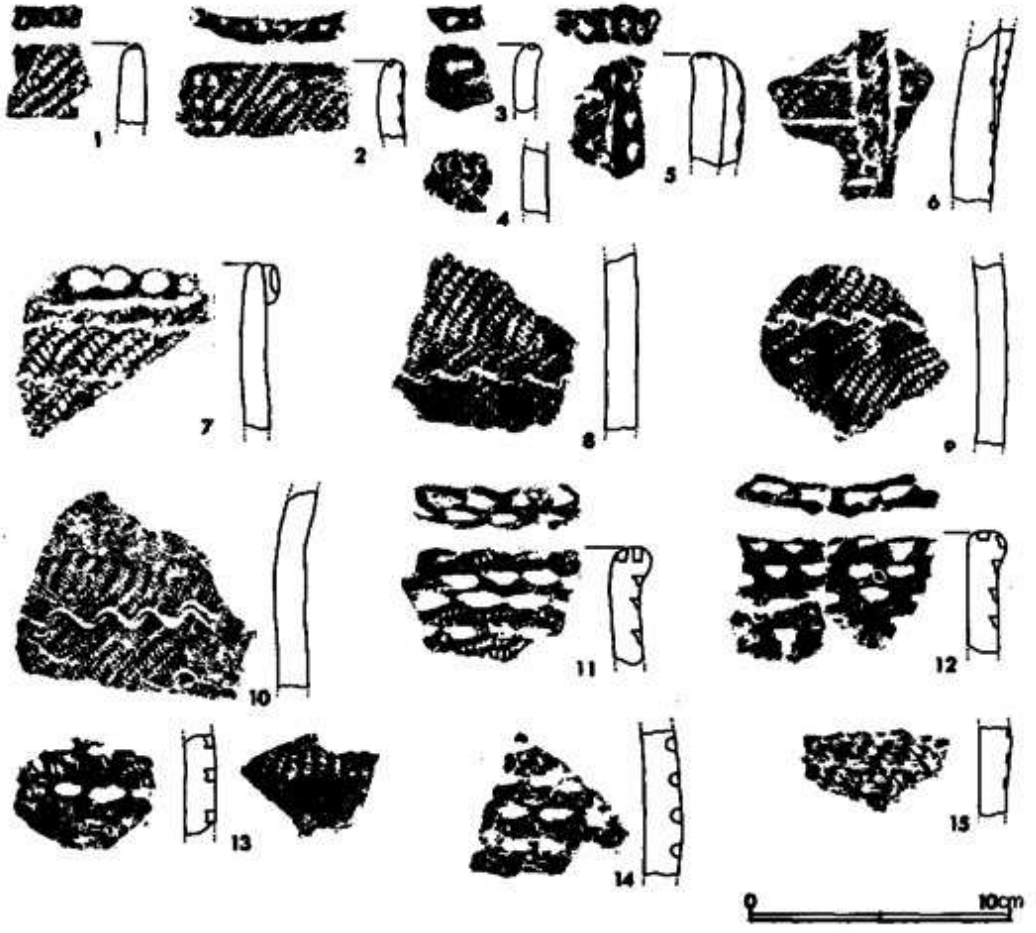
11～13には，微量の砂粒と繊維質のものを混入する。14には，石英片も含めて多量の砂粒を混入する。焼成は，2は非常に良好で，他も概ね良好である。色調は，2，14，15は赤褐色，3，4は茶褐色，11～13は灰褐色を呈する。器厚は0.8～1.3㎝程である。

第3類　（第16図5）

縄文を地文とし，口縁部に垂下する貼付帯を有する。

口縁部に小突起を有し，この突起頂部より幅約0.9㎝の貼付帯を垂下させ，貼付帯上及び突起頂部に，細い竹管工具により連続刺突文が施文されている。

器形は，深鉢形であろう。胎土中には，石英片その他の砂粒を多量に混在する。焼成は，



第16図　S238遺跡発掘区出土土器拓影図

概して良好で，色調は，褐色を呈する。器厚は1.2cmである。

第4類　（第16図6）

地文に縄文を施文し，横位の沈線と口縁に垂下する貼付帯を有する例である。

口縁部破片と考えられるが，口唇部は欠損している。地文の縄文を施文後，口縁部に幅約1.0cmの貼付帯を垂下させ，貼付帯をはさんで横位に4～5本の沈線を配する。貼付帯上には，篦状工具による左傾する刻み目が施されている。

器形は，口縁部が幾分外反する深鉢形となろう。胎土中には，若干の砂礫を混入する。

焼成は，概ね良好で，表面に少量の炭化物の附着がみられる。色調は，黒褐色を呈する。器厚は1.1cmである。

第5類　（第16図7～10）

地文として綾絡文を有する縄文を施文し，口唇部及び口縁部に横走する貼付帯がある。

7は，口縁部破片で，地文の縄文を施文後，口唇部に横走する幅約1.3cmの貼付帯を配する。貼付帯上には，指頭による押圧がある。

8～10は，胴部破片で，地文に綾絡文のみられる縄文がある。10は，現在は剥脱しているが，横走する貼付帯があったと思われる。

器形は，口縁部がわずかに外反する深鉢形となろう。胎土中には，砂礫を多量に混入し，8の表面，9の内面，10の内面の一部には，少量の炭化物の附着がみられる。焼成は，概して良好で，色調は，7，8，10が黒褐色，9が黄褐色を呈する。器厚は，1.1～1.4cmである。

以上，本遺跡出土の土器について，便宜的に第1類から第5類までに分類し，その概要を説明した。

これら各グリッド出土の土器は，同一時期の所産と考えられ，縄文時代中期のサイベ沢Ⅵ式ぐらいの時期に相当するものであろう。

サイベ沢Ⅵ式土器が最初に注目されたのは，函館市サイベ沢遺跡（児玉・大場・武内1958）第1地点第5層においてであった。その類例は，浜益郡浜益町浜益遺跡（大場・石川1961）川下地区，旭川市嵐山遺跡（嵐山遺跡調査会編1968）B類，恵庭市柏木川遺跡（高橋編1971）1～6号竪穴住居址，札幌白石神社遺跡（加藤・上野・羽賀1973）第Ⅲ群・第Ⅳ群などがあげられる。しかし，これら諸遺跡出土の土器相互間にも若干の差異が認められる。

上記の遺跡の内，本遺跡出土の土器にその特徴が最も類似するものとして，柏木川遺跡竪穴住居址出土の土器があげられる。（佐藤　雄治）

第2節　石　　器（第17図，図版8b）

出土石器は，石鏃1，掻器3，削器1，磨製石斧2の計7点である。以下個別に説明する。

1　石　鏃（第17図1）

縦長の剥片を素材とし，細身，扁平で，先端及び基部は欠損していて不明であるが，有茎で，逆刺の余り強くない対称形を呈するものと考えられる。両面は，押圧剥離により入念な調整が施されている。

断面は，凸レンズ状を呈する。黒曜石製。

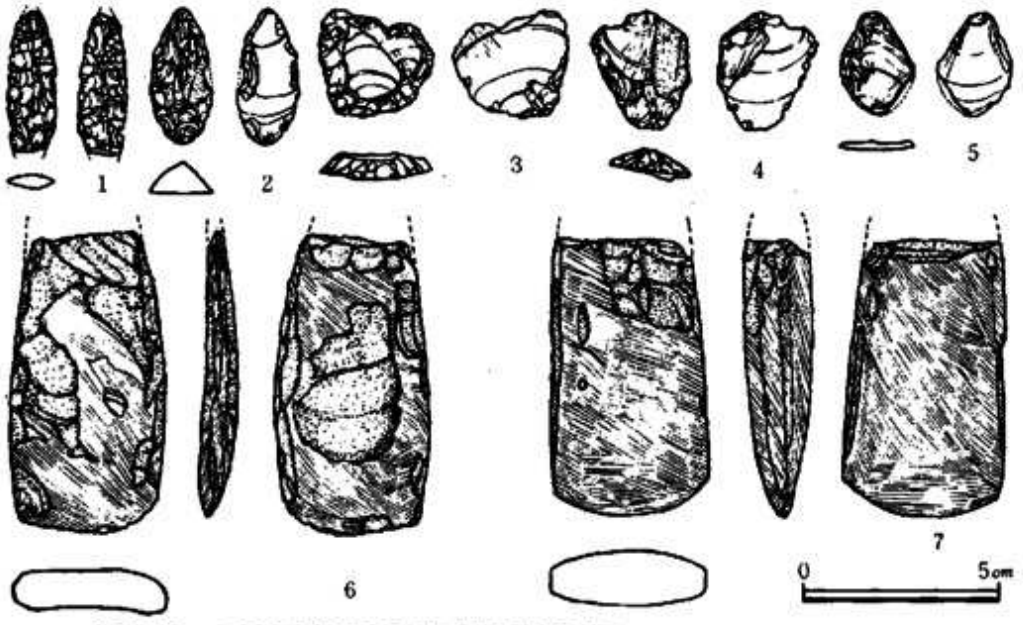
2　掻　器（第17図2～4）

2は，部厚い縦長の剥片を素材とし，自然面を残す部分を除いて，ほぼ全周に調整剥離（二次加工）が施されている。側縁の一部を欠損する。断面は，三角形を呈し，黒曜石製。

3は，幅広の剥片を素材とし，周辺及び主要剥離面の一部に，調整剥離が施されている。断面は，台形を呈する。黒曜石製。いわゆる円形掻器（ round scraper ）であろう。

4は，自然面を残す部厚い剥片を素材とし，左側縁部及び下部に調整剥離が施されている。又，主要剥離面の一部には，剥離痕がみられる。断面は，三角形を呈する。黒曜石製。

2，4は，いわゆる先刃式掻器（ end scraper ）であろう。



第17図　S238遺跡発掘区出土石器実測図

3　削　　器　（第17図5）

扁平な剥片を素材とし，一部欠損するが，両側縁及び下部に細かな調整剥離が施されている。断面は台形を呈する。黒曜石製。いわゆる削器（ side scraper ）であろう。

4　磨製石斧　（第17図6，7）

6は，扁平・幅広の板状石を素材とし，両側面から粗い打割を加えた後に，研磨が施されている。研磨は，刃部が主で，他は散発的である。両側面は，原石面を軽く研磨しただけである。研磨痕は，両面及び両側面は右下りが主で，刃部は左下り或いは短軸方向である。基部は欠損する。刃部は，幾分非対称の両刃である。刃部のエッジには，使用による刃こぼれが顕著にみられる。緑色片岩製。

7は，厚手・幅広の板状石を素材とし，研磨は，全体的に入念に施されている。研磨痕は，両面及び両側面は右下りで，刃部は短軸方向である。基部は欠損する。刃部は，幾分非対称の両刃である。刃部のエッジには，使用による細かな刃こぼれがみられる。緑色片岩製。

以上，本遺跡出土の石器について，その概要を説明したが，他の遺跡と比較検討するだけの十分な資料を出土しているとは言い難い。

高橋正勝は，縄文時代中期の石器群組成に関して，「石器は，吉崎の言う，縄文文化の基本的な組み合せを持っている（吉崎1965）」として，石鏃，石匙，キリ，スクレパー，ナイフ，磨製石斧，石皿，手斧，砥石，敲石，石錘などをあげ，この内，「円筒土器の特徴的な石器としては，ナイフといわゆる北海道式石冠，それに石皿，擦石など植物を加工するための石器が，他の土器に比べ豊富なことである」（高橋1972a）と述べている。しかし，本遺跡においては，ナイフ，北海道式石冠，それと豊富なはずの石皿，擦石など全く出土しなかったのは如何なる理由によるものであろうか。

さらに，高橋は，本遺跡に最も近似する柏木川遺跡の竪穴住居址出土の石器——即ち，銛先，チョッパー，凹石，砥石，磨製石斧，矢柄研磨器，スクレパー，擦石，敲石——について，グリッド出土の北海道式石冠，竪穴住居址出土の石銛を除けば，「このような石器のセットは，北筒式土器あるいは初期の余市式土器に伴うセットにより近いと思われる」（高橋1971）と述べている。　（佐藤　雄治）

第1表　S238遺跡出土石器一覧表

図版番号	出土地区	層位	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
				mm	mm	mm	g		
14－1	ⅡH 4	第1層	石鏃	（35.5）	12.0	3.3	1.4	ob.	先端・基部欠損
2	ⅡH 6	〃	擦器	34.5	15.7	8.0	4.3	〃	一部欠損
3	ⅡH 10	〃	〃	27.5	28.5	7.0	6.6	〃	〃
4	Ⅲ	表採	〃	30.0	24.0	7.0	4.8	〃	
5	ⅠC 13	第1層	削器	26.5	18.2	2.2	1.2	〃	一部欠損
6	ⅡC 6	〃	磨製石斧	（77.0）	38.0	11.0	57.5	gre.	基部欠損
7	ⅠE 7	第2層	〃	（77.0）	40.0	18.0	84.1	〃	〃

（略号）〔石質〕ob.(obsidian)：黒曜石，gre.(green schist)：緑色片岩
〔計測値〕（　）で，くくった計測値は欠損していることを示す。

第3章　総　　括

前述の如く本遺跡は，団地造成に伴う発掘調査であった。こゝ数年来，札幌市では，人口の急激な増加に伴い，ベッドタウンとして周辺地域の開発が押し進められている。このような中にあって，本遺跡は，破壊をまぬがれ記録保存が行われた。しかし，何人にも知られることなく破壊された遺跡も数あることであろう。

本遺跡は，腐植土の発達がかなり悪く，又耕作作業などにより，プライマリーな包含層が残っていないために，遺構の検出を目標とした。しかし，遺構としては，第Ⅱ区に集中する時期・性格共に不明の小規模なピット群と，第Ⅰ・Ⅱ区で数ケ所，散乱状態で焼土が検出されただけである。特に，第24号，第25号ピットの例の如く，明らかに木の根の痕と思われるピットもあり，また第5，13，14，21，22号の5連ピット，第10号，第19号，第27号ピットなども，最近注目されてきている所謂「風倒木痕」である可能性が強いように思われる。更に，規模の小さい皿状を呈するピット群も，木の根の痕か，その他の原因による自然の作用による落ち込みである可能性が強い。

しかし，我々が遺跡を調査していて，しばしばみつかる時期及び性格不明のピット群に関しても，それが人間の手になる人工的な遺構なのか，或いは自然作用の結果なのか，またそれが出来たのはいつ頃かといった問題も，個人の独断で切り捨てる前に1つ1つ明らかにせねばならない。その意味で，今回のS 238遺跡の報告においては，発見されたピットを，独断を混じえず，ありのまま事実として，すべて報告するという態度をとった。

この報告が，その意味で，今後の遺跡の調査に際して，1つの教訓とピットの性格の究明に何か役立てば幸である。

出土遺物は，土器及び石器のみで，量的にも少なかったが，土器は，縄文時代中期のサイベ沢Ⅵ式頃に位置する単一な資料を出土した。その特徴は，報告書を見る限りでは，柏木川遺跡竪穴住居址出土の土器に最も近似している。このサイベ沢Ⅵ式土器を出土する遺跡は，道南部及び道央部に分布するが，現在の所，数ケ所を数えるのみである。本遺跡発見の資料が縄文中期の研究発展の一資料となるであろう。

吉崎は，「河川の上流にあるせまい段丘のうえから少量の円筒土器が発見されることがある。おそらくこうした小遺跡は，かれらのテリトリーのなかで狩小屋的存在であったとしてよいであろう」（吉崎1965）と述べているが，本遺跡もこのような例であろうか。

（佐藤　雄治）

□引用・参考文献

大場　利夫・石　川　徹　1961　『浜益遺跡』（単）

加藤　邦雄・上野　秀一・羽賀　憲二　1973　『白石神社遺跡』札幌市文化財調査報告Ⅰ

児玉作左衛門・大場　利夫・武内　収太　1958　『サイベ沢遺跡』（単）

嵐山遺跡調査会編　1968　『嵐山遺跡』（単）

高橋　正勝編　1971　『柏木川』（単）

高橋　正勝　1972a「北海道における縄文文化中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会誌』9　所収

高橋　正勝　1972b「北海道における縄文文化中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』10　所収

吉崎　昌一　1965　「縄文文化の発展と地域性―北海道」『日本の考古学Ⅰ』Ⅱ所収

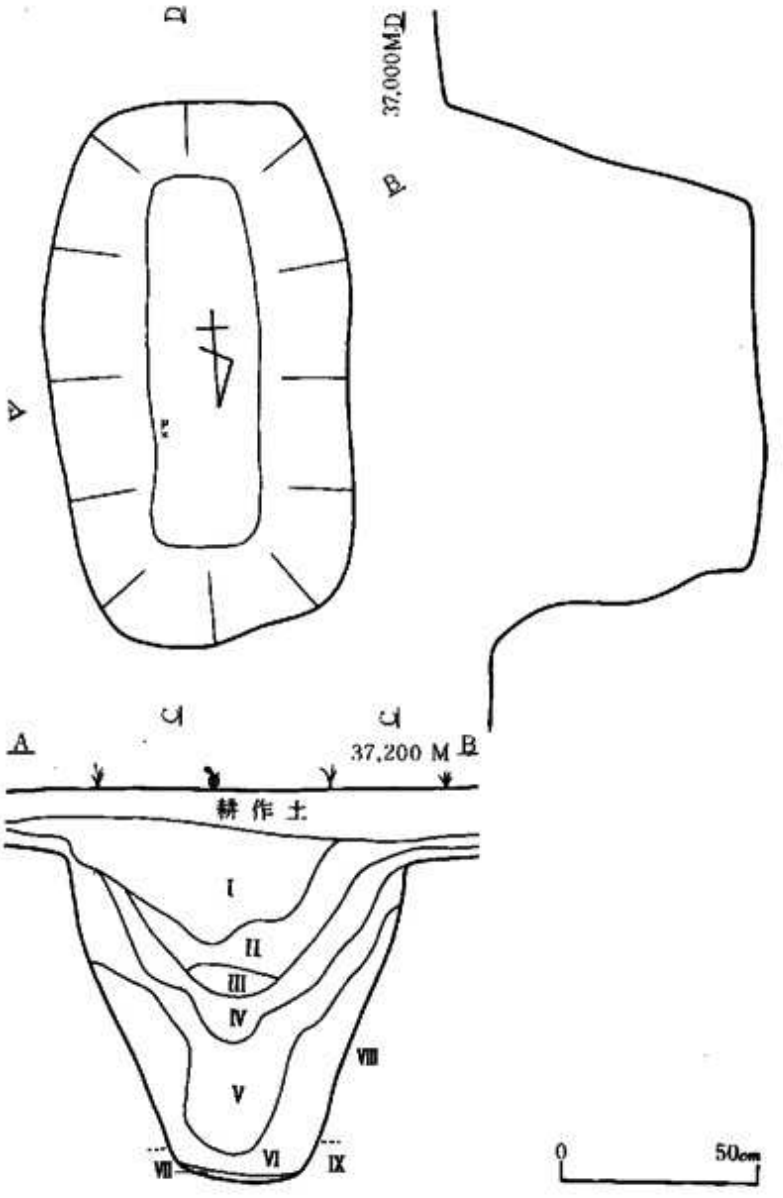
S 239　遺　跡

Ⅲ　S239　遺　跡

第1章　遺構及び出土遺物

C－Ⅲ区，G－Ⅲ区より各1個のピットが検出された。

第1号ピット　（第18図，第20図18，図版11，12A）



第18図　S239遺跡第1号ピット実測図

壙口139×78㎝，遺構確認面からの深さ91㎝の略々長方形のピットである。底面，壁はしっかりしており，立上りはかなり急傾斜である。北側半分の壁4～50㎝の所には段がある。底面は平担である。

層準は，第Ⅰ～Ⅲ層は，黒色土層で，第Ⅱ層には，若干の火山灰を含んでいる。第Ⅳ層は，黒色土と火山灰が混入した黒褐色土層。第Ⅴ層は，火山灰層に若干の黒色土が混入した暗灰褐色土層。第Ⅵ層は，灰褐色火山灰質土層。第Ⅶ層は，黒灰色土層で，黒色土を多く含んだ層で，底面について堆積している。地山は，第Ⅷ層，明灰褐色火山灰層，第

Ⅸ層，暗灰色火山灰層の二つに分けられた。また，壁には鉄分の沈着がみられた。

遺物は，第Ⅵ層中より，胴部土器片が1点みつかったのみである（第20図18）。節が大きめのＲＬの縄文が施され，器厚11㎜で，色調灰褐色を呈し，胎土には繊維を含んでいるが焼成は極めてよい。以上の破片内の観察のみからであるが，トコロ第6類に近似した様相を呈するのではないかと思われる。

なお，図版12Ａに示したように，破片左には長軸18㎜，短軸12㎜，深さ7㎜の圧痕がある。文化庁の小林達雄氏の教示により，これが「クルミ」であることが判った。図版の右に示したのは，この圧痕の粘土板による陽像である。（上野　秀一）

第2号ピット　（第19図，図版12Ｂ）

壙口153×94㎝，遺構確認面からの深さ91㎝の略々長方形のピットである。輪郭は不明瞭であるが，立上りは急傾斜である。北東部の壁には，深さ40㎝位の所に段がついており，南西壁の上部4～50㎝迄は軟らかい。底面は，平らでしっかりしている。

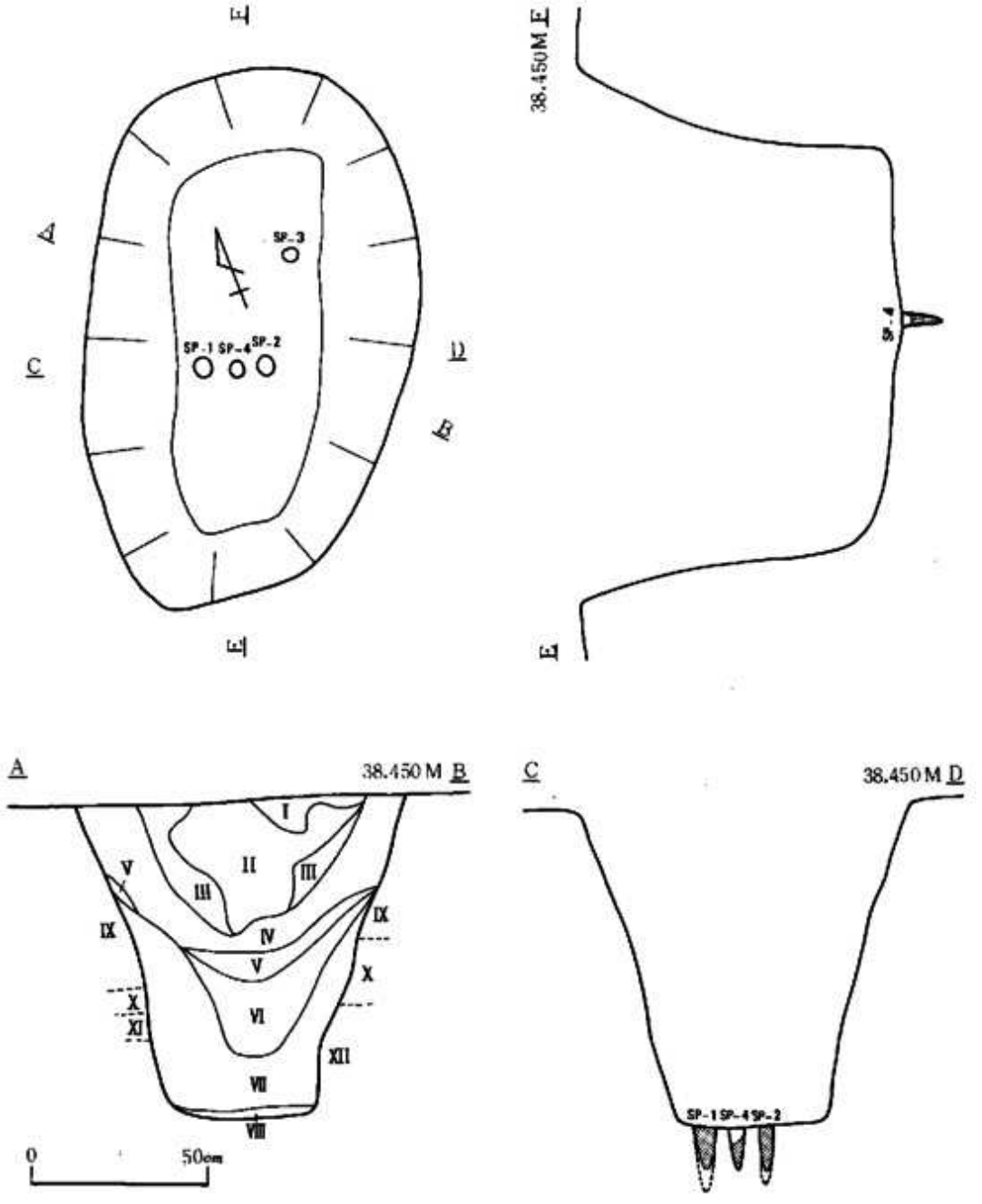
層準は，第Ⅰ層，暗茶褐色土層であるが，撹乱の可能性がある。第Ⅱ，Ⅲ層は，各々黒色土層，黒褐色土層で，共に地山の火山灰を含むがⅢ層の方が多い。第Ⅳ，Ⅴ層は，各々暗灰褐色土層，暗灰褐色火山灰質土層で，前者には若干の黒色土を含んでいる。第Ⅵ，Ⅶ層は，各々灰褐色火山灰質土層，赤褐色火山灰質土層で，極めて地山に近い層であるが，地山よりは軟らかい。Ⅶ層には，鉄分が少し沈着して堆積している。第Ⅷ層は，黒灰色土層で，底面に密着して堆積している。第Ⅸ層から第Ⅻ層は，地山である。各々明灰褐色粘質火山灰層，鉄分を少し沈着した褐色火山灰層，黒赤褐色砂鉄層，灰色火山灰層である。

このピットからは，底面に小ピットが4個確認されている（SP－1～SP－4）。その内3個は，中央に一列に並んでおり，もう1個は北東側の壁よりにある。すべて，断面形が円形で，先細りする。SP－3，SP－4は，略々直すぐに打ち込まれているが，SP－1とSP－2は少し北側に傾いて打ち込まれている。深さは，15～20㎝程である。内容物は，すべて暗灰茶褐色土層である。これらの小ピットの大きさ，断面形から推して，工具を用いて掘り込まれたものではなく，直接先細りの棒状のものを打ち込んだものと思われる。

遺物は一切検出されなかった。（上野　秀一）

第2表　S 239遺跡第2号ピット小ピット一覧表

番号	形態	大きさ	深さ	内容物	備考
SP－1	丸	5×5㎝	19㎝	暗灰茶褐色土	少し北側に傾斜
SP－2	丸	5.5×5.5	16.5	〃	〃
SP－3	丸	4×4	22	〃	
SP－4	略丸	4.5×5	13	〃	



第 19 図　S 239 遺跡第 2 号ピット実測図

第2章　発掘区出土遺物

第1節　土　　器　（第20図，図版13A）

土器片の発見数が，極めて少ないので一括して説明する。

1は，LRの撚りの細い縄文地に，横走する三角形の断面形をもつ細貼付文を施こし，その上に刻目がある。貼付部の周囲は磨り消されている。器厚5～6㎜で，色調は，褐色で，胎土には，細砂を含むが縄文土器に通例みられるサンドイッチ状の炭化層がない。

2～6は，口縁部破片である。2は，小突起部分の破片で半截竹管の内面を押しつけ連続刺突した文様が，二段観察出来る。肥厚帯を有する。色調は，褐色で，胎土に小礫及び繊維を含む。3は，口唇部を欠損するが，LRの地文の上に幅広の貼付帯を横還させ，この上に半截竹管の背面を利用した連続刺突文がある。焼成は，非常によく，硬く，胎土には，小礫と繊維を含む。色調は，赤褐色である。4は，口唇部上及び口唇部直下に，平篦による連続刺突文が施こされた例である。表裏に縄文が施されているが，小破片のため判然としない。色調は暗灰褐色で，胎土には，細砂を若干含む程度で，繊維は含まない。5は，円形刺突文がある例で，表裏にLRの節の大きい縄文が，表は，横方向に，裏は縦方向に回転して施文している。口唇部は欠損する。色は，暗灰褐色である。6は，波状口縁部分の破片で，地文は観察されず，表裏共に滑沢に整形している。口唇部も，平坦に整形している。胎土には，細砂を含み，色調は灰褐色である。

7～16は，胴部片である。7～11は，節の大きい斜行縄文が施されている。7には，裏面にも同様の文様がある。色調は，7～10が赤褐色，11は灰色である。共に細砂と繊維を含んでいる。12は，撚糸文が施された土器で，13と14は，結節のない羽状縄文が施された例である。共に色調は，褐色で，14のみ胎土に繊維を含んでいる。15と16は，節の小さい斜行縄文が施された例である。各々，色は灰褐色，灰茶色で，多くの細砂を含む。15には，繊維を若干含んでいる。共に，焼成はよく，堅緻である。

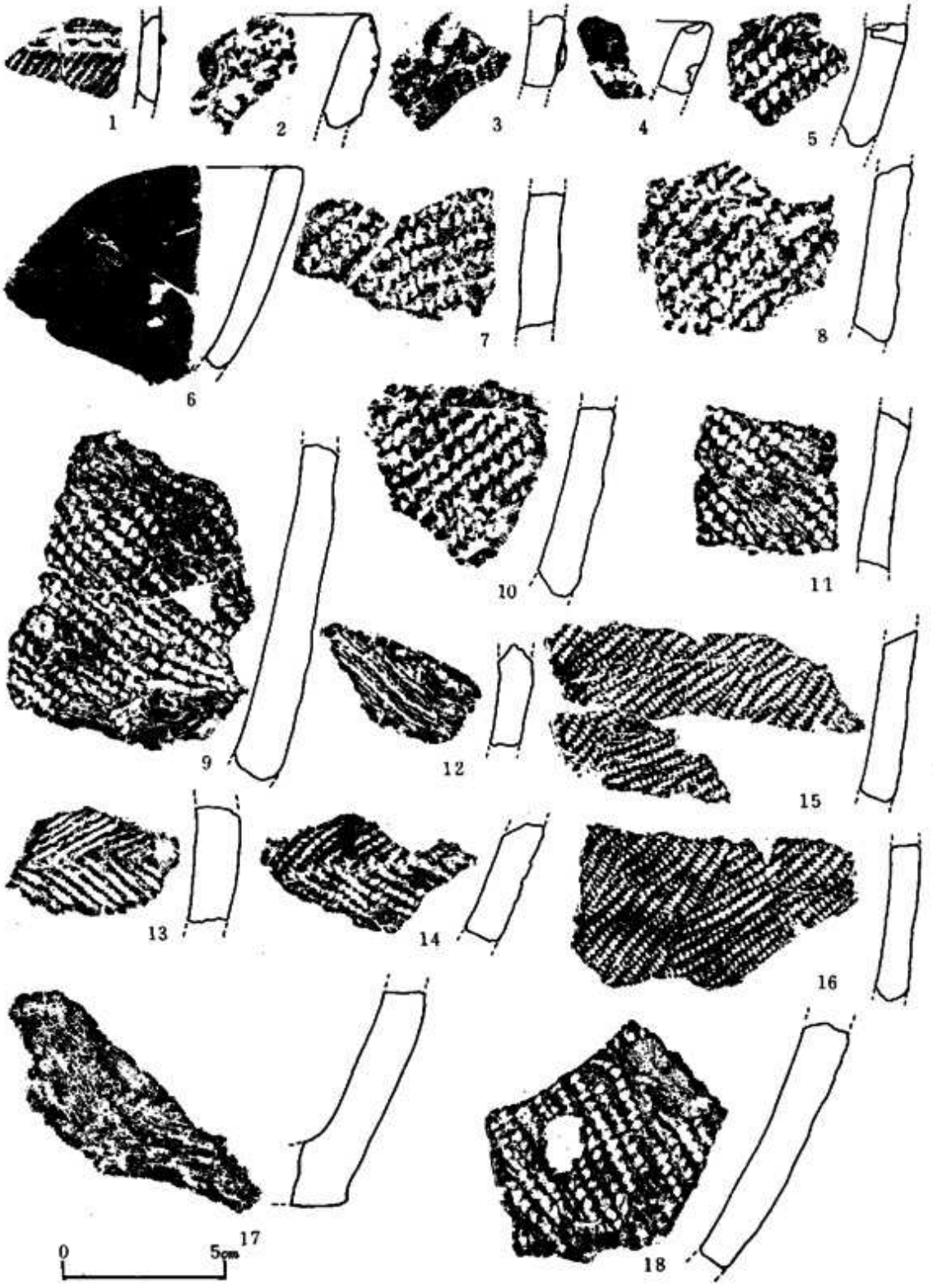
17は，底部片である。軽い張り出しがある。色は，灰褐色で，胎土に小礫と繊維を含む。

（上野　秀一）

第2節　石　　器　（第21図，図版13B）

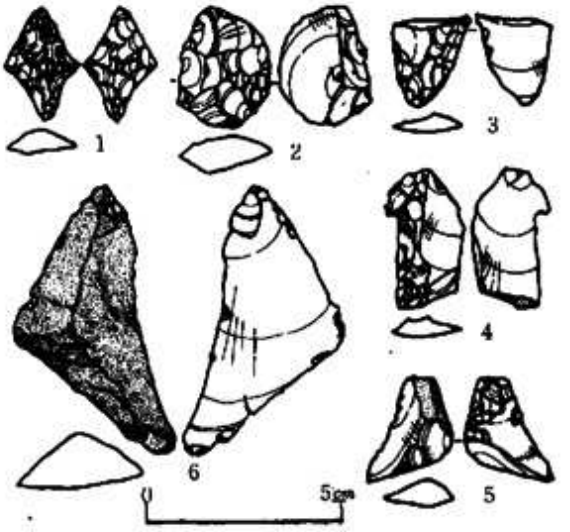
つごう6点みつかっている。全例黒曜石である。

1は，有茎石鏃である。尖頭部の幅と高さは，ほぼ等しい。2は，円形掻器に類するものである。表面上部にある素材面も，裏面の一次剥離面もポジティブである。打面は裏面右側の面で，ここより，かなり鋭角（打角138°）に打撃を加えている。打点及び打面上にはパンチ・ホールの痕が3個認められ，間接打法で剥取されたものと思われる。3は，縦



第 20 図　S 239 遺跡発掘区出土土器拓影図

長剝片を素材にして，周辺に二次加工を施している。上部は欠損する。全体に焼けている。5も同様の例で，バルブ付近に二次加工を施している。下部は欠損する。4と6は，縦長剝片である。6には，使用痕と思われる不規則な小剝離痕が，刃縁に認められる。　　（上野　秀一）



第21図　S239遺跡発掘区出土石器実測図

第3章　総　　括

第1節　ピットについて

本遺跡で認められた2個のピットは，形態および土層堆積状態においてきわめて類似したもので，同様な性格をもったピットであることがわかる。

共通項を概述すれば以下の如くである。平面プランが，ほぼ長方形を呈し，深さが91cmで深い。層の堆積状態は，底面について有機物を多く含む腐植土が水平に薄く堆積し，この上に，地山に近い土層があり，漸移的に，黒色土の含む率を増し，壙口部付近は，黒色土層である。また，ピットの上部壁の一部に段がついて壙がっているが，これは壁及び壙口のかたが崩れたためであり，この崩土が堆積したものが，壙内から壙底近くまで堆積している地山に近い土層と思われる。以上の事実は，これらのピットが，壙口部分が崩壊するまで，放置されていた――墳墓と違って，一度に埋められたのではないことを示しているものと思われる。上にある黒色土層は，この崩土の上に自然堆積したものであろう。遺物は，第1号ピットの覆土から土器片1点を得たのみである。

この種のピットに関しては，最近横浜市霧ケ丘遺跡の報告（霧ケ丘遺跡調査団編1973）において，詳細な研究が行なわれており，「陥穴（おとし穴）」として使われたのであろうと結論されている。このピットに関しては，「溝状遺構」（河野・藤本1961），「Tピット」（森田1969），「長楕円形土壙」（谷井編1973）など様々な呼称があり，また他のピットないし遺構とは分離して「特殊遺構」（千代編1974）という表現を用いている例もある。

道内においてこの種のピットが検出されたという報告には，古く静内郡静内町御殿山遺跡の第3次発掘調査（河野・藤本1961）における例があり，その後三石郡三石町鬼舞台地遺跡（中村1970），函館市函館空港（森田1969），亀田市西桔梗遺跡（千代編1974），松前郡松前町江良大津遺跡B地点（斉藤・氏江1974），恵庭市上島松遺跡（佐藤・山田1974）などがある。なお，青森県上北郡六ケ所村発茶沢遺跡（北林編1974），同千歳遺跡（青森県教育委員会編1974）にても検出されている。また，管見の範囲では，関東及び中部地方では，約15遺跡を数える。ただ傾向として，関東及び中部地方では，長方形の例が多いのに比べ，道内では，挾長な長楕円形の例が多いという事実は指摘できる。

この種のピットに関しては，霧ケ丘遺跡の報告の中で，種々の角度から検討されている。それを要約すると，以下の如くである。

(1)　立地は，傾斜地では数は少ないという以外に，あまり立地について制約，好みはない。

(2)　長軸方向は，土壙の長軸は多くの場合，等高線と直角方向，すなわち傾斜の方向を

とるが，谷状の窪地の周辺では，その谷の方向に引かれる。

(3) 土壙堆積は，底面直上には厚さ5cmほど黒色土が水平に堆積している。その上には，ソフトロームに近い褐色土が流れ込んだような状況で存在し，この土は壁に沿って貼りついたように見られる。それより上は，ソフトロームに近い褐色土，褐色土，黒色土などが相互に入り混りながら順次流れ込んだような堆積を示すが，下部ほど褐色土の占める割合が多く，上部ほど黒褐色土の占める割合が多い。

(4) 土壙は，形態から隅丸長方形，長楕円形，円形に分けられ，底部施設の有無で更に各々は細分される。

(5) 年代は，縄文後期以前で，縄文早期後半位に比定できる。

(6) 対象となった動物は，猪とか鹿で，兎，狸，狐などでもあったろう（今村1973）。

以上の事実は，多くの点において，本遺跡のピットと類似することがわかる。(2)の長軸方向の問題は，本遺跡例においても，等高線に直交し，長軸の一端は，谷を向いている。しかも2個しかみつかっていないが，両者は並列している。(3)の土壙堆積は，全く同一である。(4)の形態に関しては，AないしB型に属し，底部施設は，第2号ピットで認められた。(5)の年代に関しては，縄文中期後半位に比定される可能性が高い。以上の内，年代を除いては，全くよく一致している。このことは，本遺跡のピットが「陥穴」である可能性を指摘できるであろう。

ところで，この種のピットが陥穴であったという説は，具体的な資料の提示に乏しかったが，すでに直良信夫によって強調されている（直良1965，1968）。氏は，住居の周辺あるいはその近傍に単独に掘られている溝や穴が，クマ，オオカミといった野獣の襲来を防ぎ，あるいはまたイノシシやキツネ，タヌキ，アナグマなどを捕獲する目的で，獣の通路に掘られた陥穴であったろうという。そこで想定されている陥穴は，その上部を草木などで擬装し，見た目には周囲の地表と何ら変らぬように見せかけたものである。

本遺跡において見出された2つのピットが陥穴といったものであったとして，それが上部に擬装を施したものなのか，それともむき出しのまま使用されていたのか，その点については，調査の時点においてついに明確な結論は得られなかった。

それにしても，例えば細長い溝状のピットが一連の配置をもって掘られているような場合には，多数の人間や犬が獲物を狩り出し，追い詰めるといったような積極的な狩猟の存在も想定しえようし，その際には，溝状のピットがそれぞれむき出しのままでも十分その効果を発揮しえたのかも知れない。

だが，本遺跡例のように，2つのピットが50m程の距離を隔てて位置し，ピットの長径もそう長いものではないといったあり方からは，大勢で狩り出し，追い詰めるといった積極的な狩猟のために，これらのピットが掘られたのだとは考え難い。これらが陥穴であるならむしろ，たまたま通りがかった獣が捕獲されることを期待して，掘ったのだと考えた

方がより自然であろう。また，この2つのピットにはさまれる地帯に住居が存在した形跡は乏しく，猛獣の夜襲を恐れる心が，これらのピットを掘らせるに至ったというわけでもなさそうである。

かつて，札幌市周辺には，ヒグマ，エゾシカ，エゾオオカミ，キタキツネ，エゾリス，エゾノウサギ，エゾタヌキ，エゾイタチ，エゾモモンガなどの獣類が生息していた（札幌市史編集委員会1958）。とりわけエゾシカの生息は数多く（犬飼1952），地名にもシカにちなんだものが知られている。(註)

(註)

札幌市近効の鹿にちなんだ地名には，豊平川筋にYuk－nikuri（鹿林）（現在の札幌市山鼻）という地名があり，フシュコサッポロ川筋にはYuk－mindara（鹿庭）（現在の札幌市厚来）という地名がある。また，芦別川筋には，Sandarotkihi（鹿を下す処）という地名もある（永田1972）。

なお，イノシシは北海道には生息しなかったと考えられている(犬飼1960，金子1971)。

札幌市周辺に生息していたこれらの獣類を捕獲対象とする陥穴が存在したものと考えると，それは積雪のために冬期間は役立たず，恐らくは春から秋にかけて利用されたのであろう。

いずれにせよ，この2つのピットが獣の捕獲を目的に掘られた陥穴であるという確証は，現在必ずしも得られているわけではない。この種のピットの性格に関しては，今後より多角的な視点から解明がはかられるべきであろう。　　（上野　秀一・高橋　和樹）

第2節　遺物について

まず，土器群については，基本的に3群に分けられる。

第1群は，第20図1に示した例で，所謂「東釧路Ⅲ式」（河野・沢ほか1962）に比定されるが，刻目を施こした細隆起線があるところから，沢（沢1969）のいう仮称「コッタロ式」に類似する。従って，縄文早期末葉に位置するものである。

第2群は，本遺跡で最も多く同図2～5，7～14，17に示したもので，小突起を有し，口唇部には肥厚帯があって，この上及び口唇部上に，平篦による連続刺突文が施こされ，この肥厚帯の下には，円形刺突文が横巡する。地文は，節の大きい斜行縄文，羽状縄文が施され，裏面の口唇部直下にも同様なものが施文される例である。

以上の特徴からこの仲間は，トコロ第6類（駒井編1963）に対比出来る。即ち縄文中期後半に位置する。第1号ピットの覆土から出土した1片の胴部片もこの仲間かと思われる。

第3群は，同図6，15，16に示したもので，特に6は，船泊上層式（児玉・大場1952）から手稲式（大場・石川1956）の鉢形土器にみられる波状口縁部分の破片であろう。15，16は，この種の胴部片であろう。即ち，縄文後期中葉に属するものである。

石器に関しては，好資料がないため判然としないが，第21図1は，札幌市白石区白石神社遺跡の報告（加藤・上野・羽賀1973）において，第1－2類としたもので，縄文後期の手稲式，御殿山式土器に共伴することが多いものである。なお，同図2の資料は，パンチ・ホールが観察出来る資料で，台石打法で剥片を剥離している。　（上野　秀一）

第3節　遺跡の性格と時期

以上各項目に亘って説明して来たが，本遺跡の出土土器は，縄文早期末・中期後半・後期中葉の資料である。その内，主体となるのは，縄文中期後半（トコロ第6類）である。

おそらく，縄文中期後半から後期中葉に営なまれた遺跡であったろうと思われる。

本遺跡は，遺物の出土量が僅少であり，土器においては，その個体数も極めて少ない。また，みつかった2個のピットは，「陥穴」として利用されたことが，ほぼ諒解される。おそらく，本遺跡は，その性格として住居地域ではなく「猟場」であったものと思われるのである。

その意味で，縄文時代における生活空間の利用のしかたを示す好例として，注目されることであろう。　（上野　秀一）

□引用・参考文献

青森県教育委員会編　1975　『むつ小川原開発に伴う新住区予定地内千歳遺跡（13）発掘調査略報』　青森県文化財調査報告書第18集

犬飼　哲夫　1952　「北海道の鹿とその興亡」　『北方文化研究報告』7所収

犬飼　哲夫　1960　「民族学的に見た北海道の野猪（イノシシ）」　『北方文化研究報告』15所収

今村　啓爾　1973　「鬱ケ丘遺跡の土壙群に関する考察」　『鬱ケ丘』所収

大場　利夫・石川　徹　1956　『手稲遺跡』（単）

加藤　邦雄・上野　秀一・羽賀　憲二　1973　『白石神社遺跡』　札幌市文化財調査報告書Ⅰ

金子　浩昌　1971　「古代北海道のイノシシ」　昭和46年1月4日付北海道新聞

北林八洲晴　1974　『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』　青森県埋蔵文化財調査報告書第9集

鬱ケ丘遺跡調査団編　1973　『鬱ケ丘』（単）

児玉作左衛門・大場　利夫　1952　「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘について」　『北方文化研究報告』7所収

河野　広道・沢　四郎・岡崎　由夫・山口　敏・小沼　宗心　1962　『東釧路』（単）

河野　広道・藤本　英夫　1961　「御殿山墳墓群について－第三次発掘報告」　『考古学雑誌』46－4所収

斉藤　傑・氏江　敏文　1974　「大津遺跡B地点」　『松前町大津遺跡発掘報告書』所収

札幌市史編集委員会編　1958　『札幌市史』　産業経済編　付自然環境編

佐藤　忠雄・山田　忍　1974　『上島松遺跡』　恵庭市教育委員会

沢　四郎　1969　「従来に於ける早期縄文土器の編年について」　『釧路史学』創刊号所収

谷井　彪・並木　隆・宮崎　朝雄　1973　「坂東山遺跡B地点の発掘調査」　『坂東山』所収

駒井　和愛編　1963　『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上）』（単）

千代　肇編　1974　『西桔梗－函館圏流通センター建設用地内遺跡調査報告書』　函館圏内開発事業団

永田　方正　1972復刻　『北海道蝦夷語地名解』　国書刊行会

中村　福彦　1970　「北海道三石町兔舞台地遺跡」　『日本考古学年報』18所収

直良　信夫　1965　『古代人の生活と環境』　校倉書房

直良　信夫　1968　『狩猟』（ものと人間の文化史）　法政大学出版会

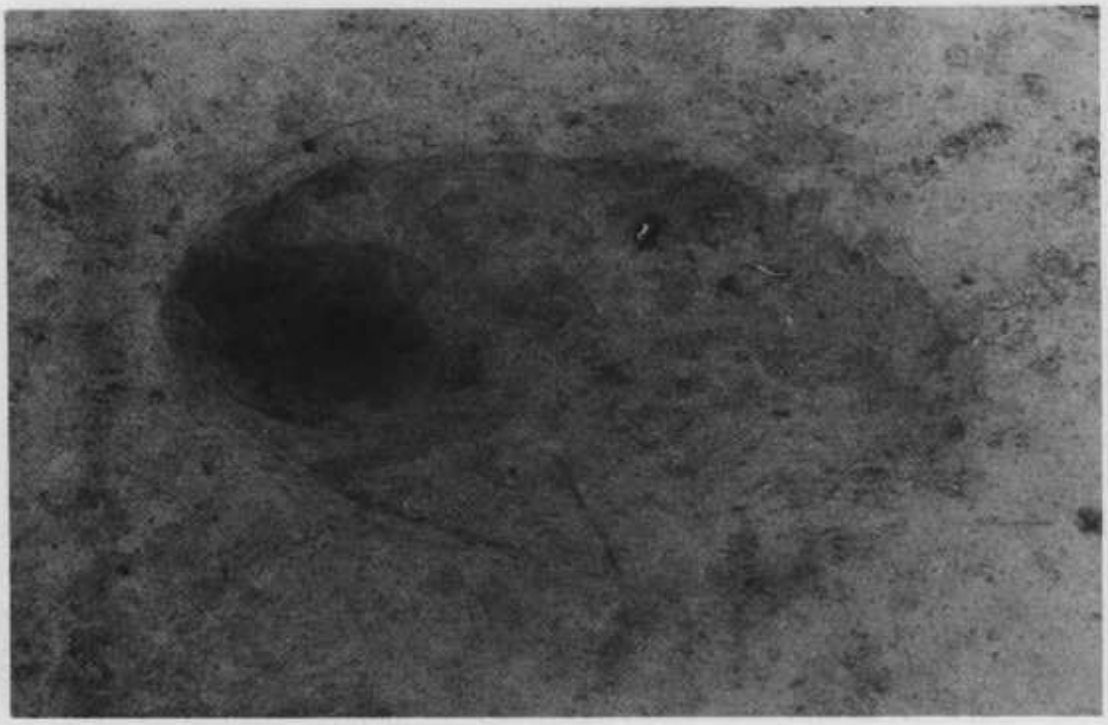
森田　知忠　1969　『函館空港整備事業の内・遺跡発掘調査実績報告書』　函館市教育委員会

図 版 1

A　S238遺跡遠景（東南より）

B　S238遺跡第1号ピット

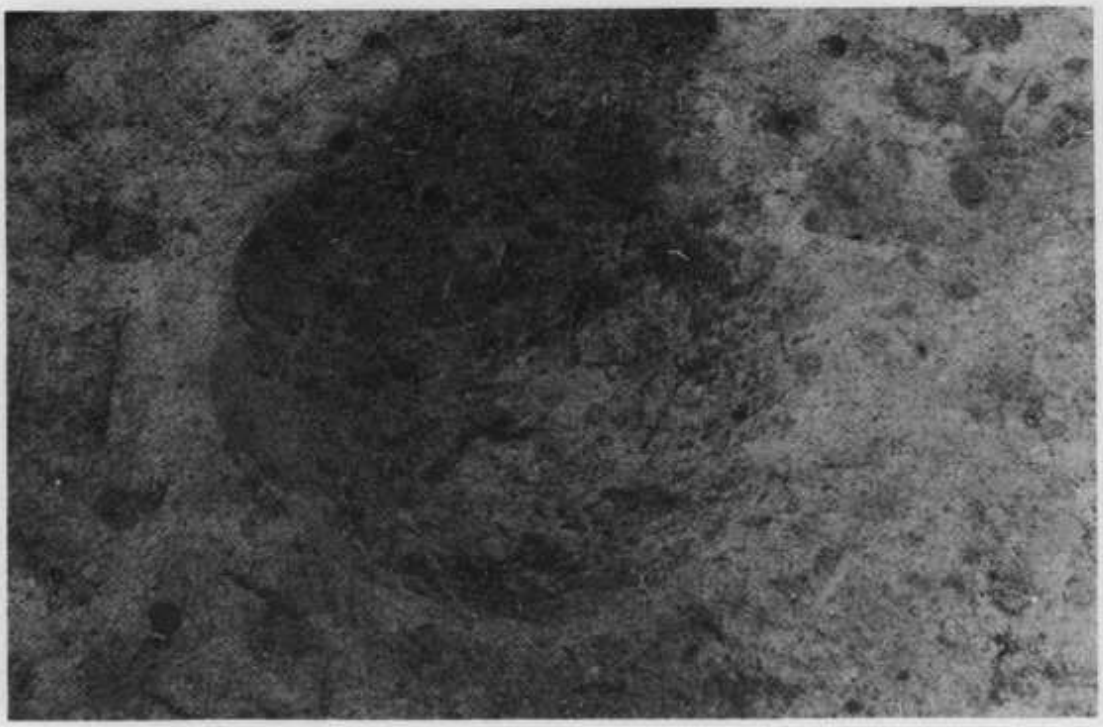
A　S 238遺跡第 5 号，第13号，第14号，第21号，第22号ピット



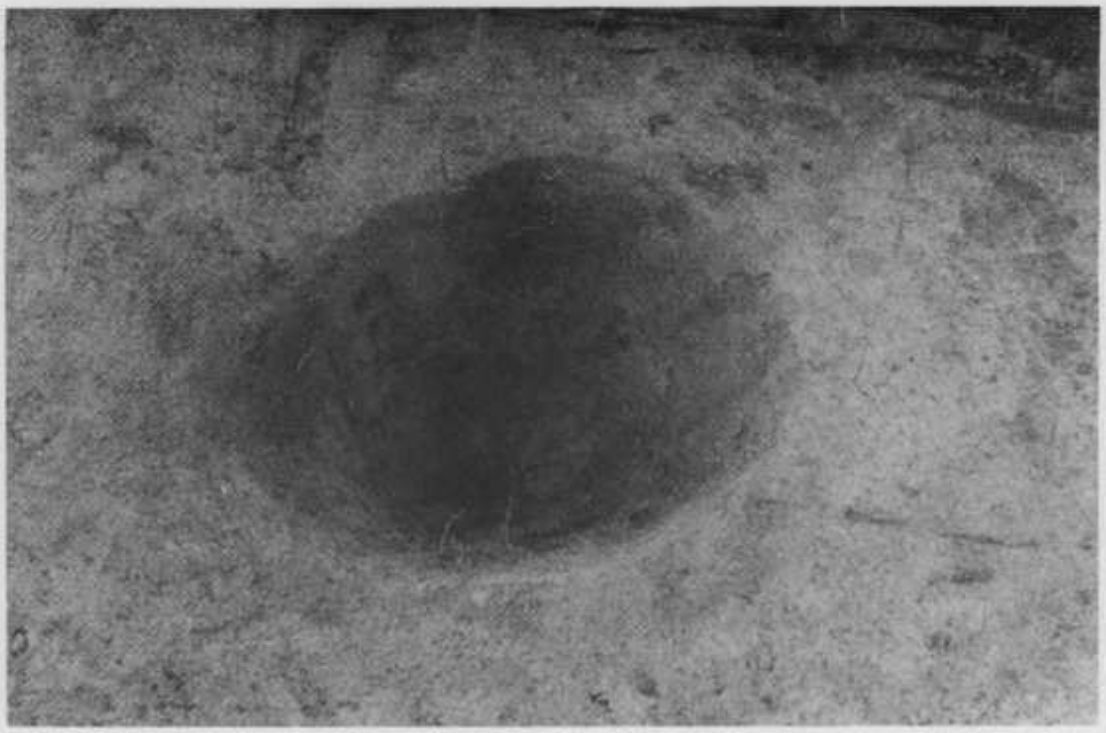
B　S 238遺跡第 9 号ピット

図 版 3

A　S 238遺跡第10号ピット

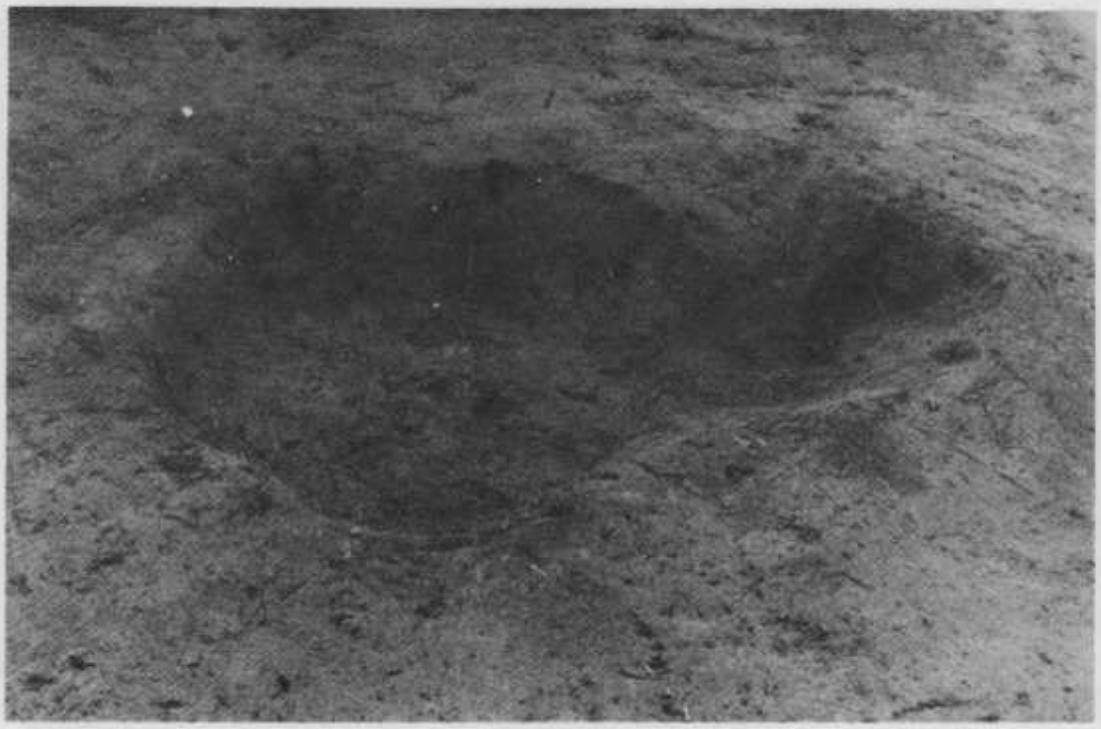


B　S 238遺跡第11号ピット



A　S 238遺跡第12号ピット

B　S 238遺跡第19号ピット



A　S 238遺跡第20号ピット及び第13号焼土

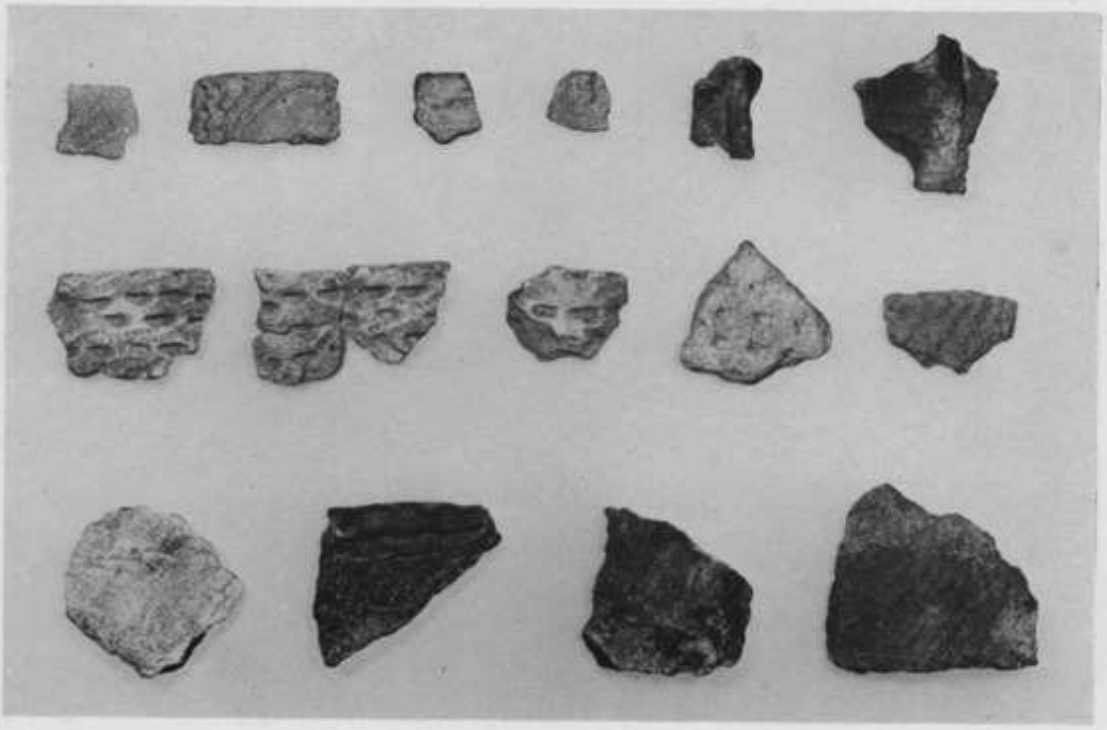
B　S 238遺跡第23号ピット

A　S 238遺跡第9号焼土

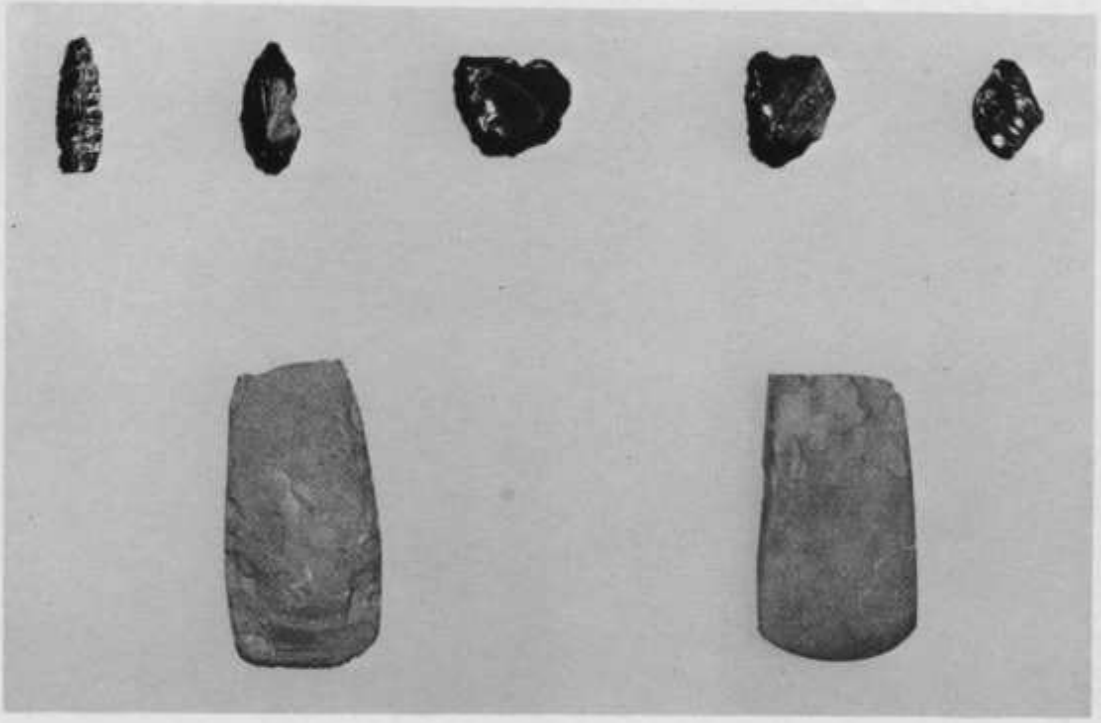
B　S 238遺跡第10号焼土

A　S 238遺跡第11号焼土

B　S 238遺跡磨製石斧出土状態



A　S238遺跡発掘区出土土器



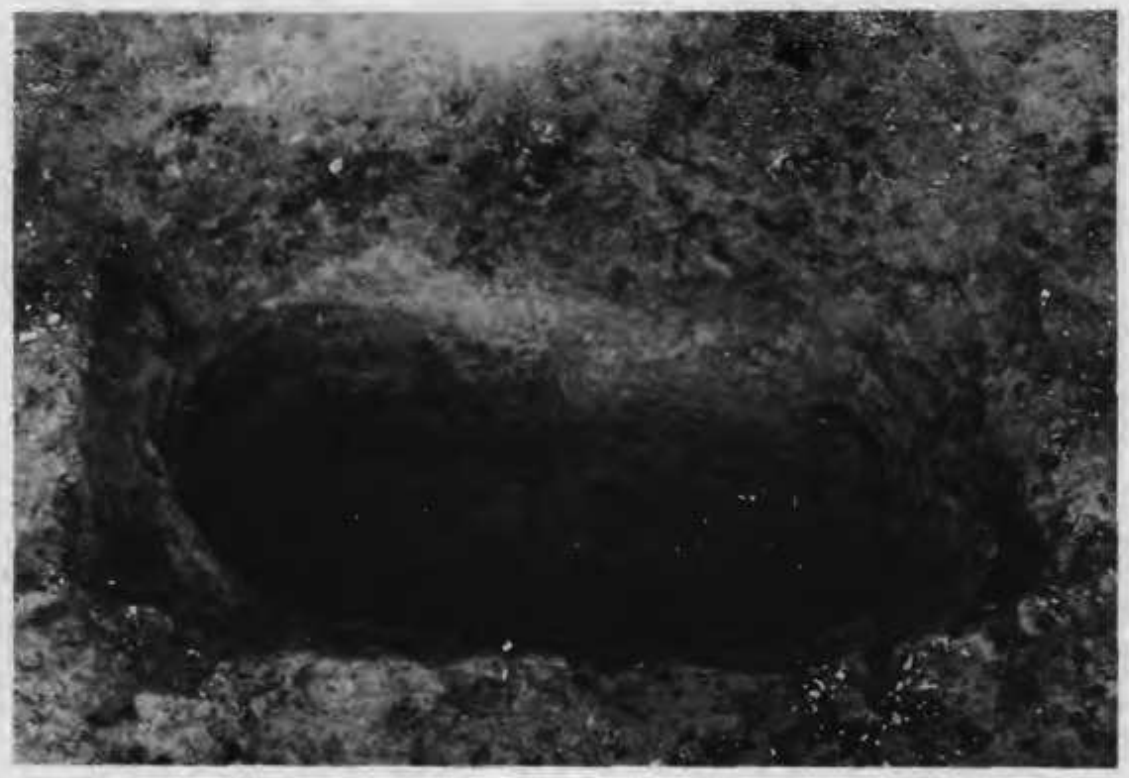
B　S238遺跡発掘区出土石器

A　S 239遺跡遠景（北西より）

B　S 239遺跡遠景（南西より）

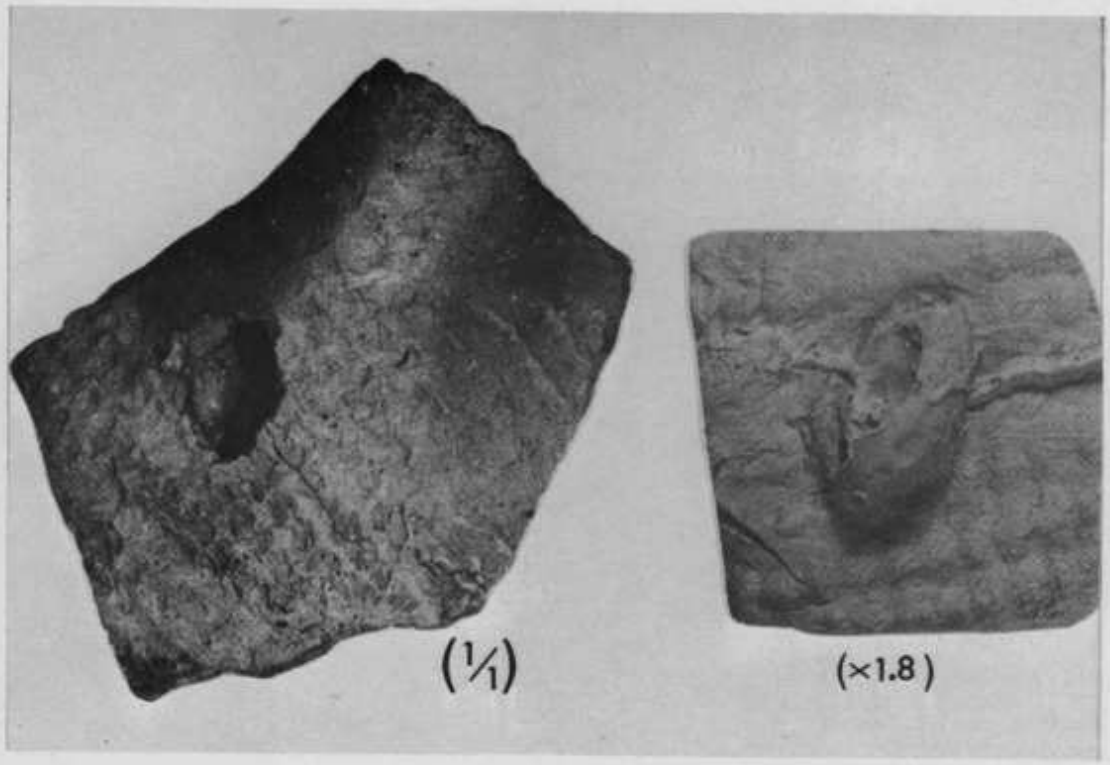
A　S 239遺跡発掘風景(1)

B　S 239遺跡Ⅱ－D －13区南西壁セクション

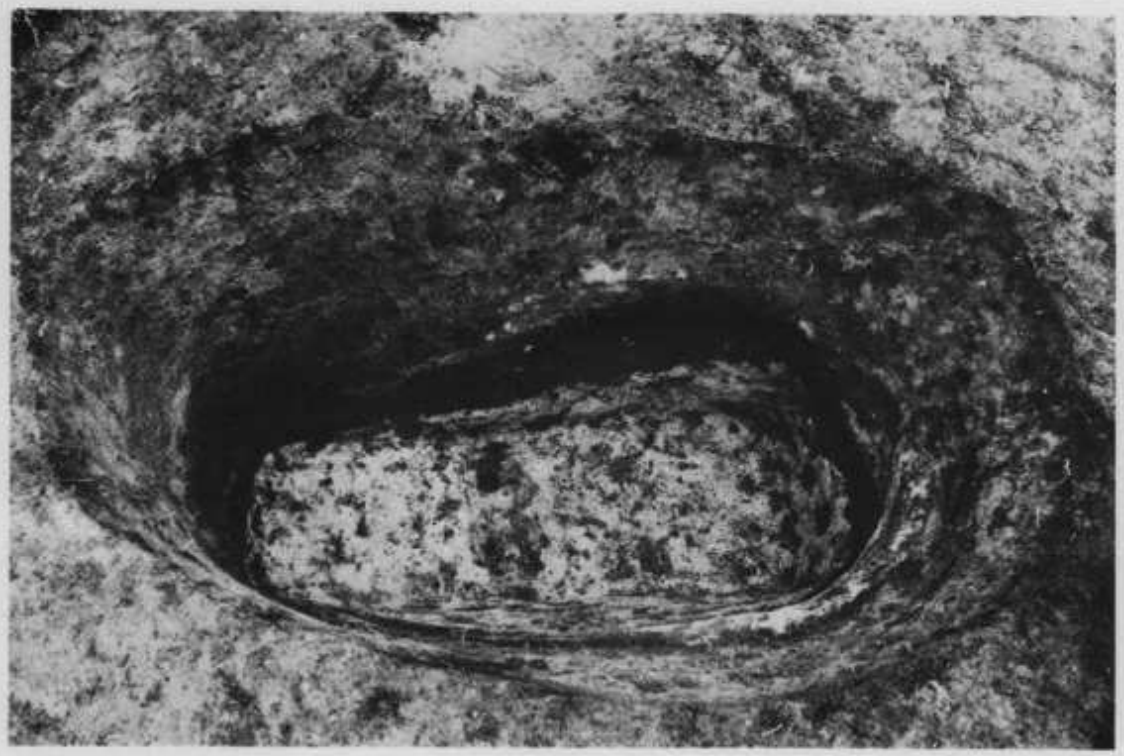


A　S239遺跡第1号ピット（西より）

B　S 239遺跡第1号ピットセクション（北西より）



A　S 239遺跡第1号ピット出土土器（右：陽像）



B　S 239遺跡第2号ピット（南東より）

A　S 239遺跡発掘区出土土器

B　S 239遺跡発掘区出土石器

A　S 239遺跡発掘風景(2)

B　S 239遺跡発掘風景(3)

札幌市文化財調査報告書　Ⅸ

S238遺跡

S239遺跡

昭和50年7月15日　印刷
昭和50年7月31日　発行

発行者　札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目
印刷所　富士プリント株式会社
札幌市中央区南16条西9丁目